異世界からの勇者=異世界の魔王

鰐氏亀太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からの勇者＝異世界の魔王

【Ｎコード】

Ｎ４１４５Ｒ

【作者名】

鰐氏亀太郎

【あらすじ】

最強最悪の魔王として世界を支配した彼は暇を持て余してた。やってくる勇者はスライムのような雑魚、裏切り者の作戦は小学生が考えるような低レベルなもの。そんな生活を一転させたのは勇者でも裏切り者でもなく異世界からの勇者召喚だった。新たな世界に新鮮さを見出した彼は勇者として魔王を倒すことになる。「不意打ち？　バカめ。高等戦術と呼べ」

おしらせ：主人公最強タグがありましたが、ストーリーの見直しの際同レベルの敵なども出てくるので変えさせていただきました

プロローグ「俺の人生は壊れている」

この世界は魔法で発展してきた、そういえば世界観が分かるだろうか。魔法が発見されたのは遠い昔、記録にも載っていない。魔物が現れたのも魔法が発見されたのと同時期だと言われているが真相は定かではない。魔力を消費することで魔法が使える、魔力はほとんどの人間にあるが魔法が使えるほど魔力を持つものは少ない、そんなことで魔法使いは貴重な戦力とされた。戦場で大暴れする者もいれば実験動物（モルモット）になるものもいる。

これだけではわかりにくいだろうから少し詳しく説明しよう。

魔力はエネルギー、力やスピードを上げることができる。これが無ければそもそも魔法は使えない。

詠唱は全体の安定感。ど素人が無詠唱などすれば威力や速度がダメになる。

例）炎よ、灼熱の槍となりわが敵を貫け、〈フレイムランス〉！

感情は誤差を生む。感情の明暗により魔法は強くもなり弱くもなる。感情に必要なのは意識、自分が使おうとしなければ魔法は使えない、ゆえに気絶している（意識がない）間は魔法は使えない。

まあ魔法についてはこんなところだろう。

さて、次は俺の波乱万丈の人生を聞いてもらおうか、なに？　聞いてもいないのに何で語り始めるの？、だと？　そんなことは決まっているだろう。説明しないとストーリーが始まらないからだ。文句は作者に頼む。

◆◇◆◇◆

俺の人生は壊れている。いつから壊れたのかは知らないし、知りたくもない。

母は俺を産んだ直後に死んだ。だから自分の母親の顔は覚えていない。家族は俺と父の二人だけ。田舎暮らしだったので学校には通っていなかった。

父は母が死んだのは俺のせいだと俺に虐待をしていた。いつからなんて覚えてない。気づいたら毎日のように殴られていた。

ネズミやカエルを食い、帰ってきたら殴られる。貯金を食いつぶしていく父は俺を顔がむかつくと言って殴る蹴るの暴行を繰り返す。心身ともに疲れ切った俺は仕返しなど考えもしなかった。友達もできず、心を壊され、ゴミ同然の俺は父への怒りさえ捨てた。

体を鍛えれば殴られても平気だろうか、と考え体を鍛えた。

頭が良ければどうしてこんなことになったのかわかるのか、と考え勉強した。

魔法がうまくなれば誰かが振り向いてくれるのだろうか、と考え魔法を練習した。

才能があったかどうかなんて俺は考えなかったが確実に強くなった。

鍛えたおかげで殴られても痛みに耐えられるようになった。

学んだおかげで罠を使った狩猟ができるようになった。

魔力の操作がうまくなったおかげで傷を癒せるようになった。

だがそううまく事は運ばなかった。

父の暴行は俺が成長するたびに酷くなった。

真水を掛けられ夜の森に投げられた。その日の朝、必死に帰ってきたら殴られた。次の朝まで殴られた時は本当に死ぬかと思った。

なぜ戻るのか、理由など分からない。ただ必ず戻らなくてはいけない、それだけは分かった。
そんな地獄のような生活が続き俺は１５歳となった。顔や手足は治すことができたが、どうしても治せない傷も体についた。服を着れば傷は隠れるし、そのレベルの傷は年を取り筋力の落ちた父には作ることはできなかった。
心もだいぶ回復していた俺は怒りや悲しみ、喜びなどの感情を得ていく毎日に、わずかながらも幸せを感じていたのかもしれない。
その日も俺はいつものようにネズミを食べ終わると家に帰った。父はひどく酔っ払っていた。ずいぶん興奮しているようだ。
「お前がぁ！　いなけりゃ…俺の人生は狂わなかったぁ！」
いつもならこのまま殴られる展開になることを知っている俺は静かに目をつぶった。汚らしい唾を飛ばして喋る父の右手にナイフが握られていることを知らずに。
「死ぃぃぃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」
気づいた時には遅かった。右に飛んだ俺、俺の頭に向かって投げられたナイフ、そして――――――――
俺の左目は赤く染まった。
「ぎ、ぎあぁぁぁぁぁ！？」
何が何だかわからなかった。左目はものすごい痛いし目の前は真

っ赤だし俺は悲鳴を上げてるし。

「はあ、はあ、はあ、しぶとい奴めぇ…」

父がナイフを拾いに行く。
そのとき俺は見た、痛む目で、奴の貪欲で汚らしい目を。
そのとき俺は確信した。『こいつを殺さなくちゃいけない』

俺は左手で血があふれ出る左目を抑えながら右手でナイフを持った。いまだ酔い続け戯言をほざいている父に無言で近づいていき、その腹を一文字に切った。
そのあとは今考えるとすごかった。

両手両足を縛り、回復魔法で傷を治し意識を無理やり起こした。
まだ戯言をほざき続ける父を思いっきり殴った。
ナイフで体中を斬り、火の魔法で火傷を負わせた。
切り傷に木の棒を突っ込み絶叫させた。
やけどで熱くなっている肌に冷水をぶっかけてやった。
体中あざだらけになるまで殴り続けた。
酷くなった傷はすぐ回復させ、意識はなくなるたび新たな痛みで起こした。
1日中そんな地獄のような復讐劇が続き、最後は手足を切り離した。
意識を覚醒させた父は必死に俺に命乞いをしてくる。そんな哀れなゴミを俺は

「あ、あはは、あはははは、あはははははははは！！！」

狂ったような叫びとともに、父の命を絶った。

プロローグ「俺の人生は壊れている」（後書き）

１８歳→１５歳に変更しました

プロローグ2「俺は即ミンチ……になるはずもなく」

父を殺したのは良かったもののここは小さくても村だ。悲鳴に気づいて騒ぎ出すバカもいる。

仕方ないので逃げ出すｏｒ皆殺し、どちらか選ぶことになった時、実をいうと俺は奴の死の代わりに感情を取り戻し始めていた。恐怖、怒り、悲しみ、喜び、あらゆる感情が湧きあがっていく。

だがそこはあえて怒りに身を任せた。剣を持ち勇敢に俺に立ち向かってくる男たちを火だるまにし、逃げ惑う女子供を氷の槍で串刺しにした。逃げれば俺の存在が国にばれるという考えもあったが、『なぜおれに気付かなかった、なぜ気づいても無視し続けた』という怒りであの時の俺はあいつらを皆殺しにした。

村は盗賊が襲ったように見せかけるため燃やしてやった。俺の存在も闇に葬られたわけだ。村を燃やす前に金目になりそうなもの、衣服、食料など使えそうなものはほとんど持ってった。

だが俺の壊れた人生は、俺をそう簡単に逃がすつもりはないらしい。

俺がいた村は山のふもとにあったのだが、その先のずいぶんと栄えた街が魔物の大群に襲われていた。そんなことにも気づかず町に入っていった俺は即ミンチ……になるはずもなく、人も魔物も関係なく死体の山を作っちまった。

そんでもって一番デカい魔物とご対面になったんだが、そいつはまさにラスボス級の力を持っていた。

最初はただの馬鹿デカい鳥だと思っていた。

だが戦ってみるとそこらの魔物とはレベルが圧倒的に違った。

真っ赤な鱗は剣を弾くし、弓みたいに飛んでくる羽は一枚一枚ナイフみたいな鋭さを持ってる。銀色のかぎ爪は兵士を盾ごと貫い抜

くし、兜をかぶったような赤い頭には銀の角が一本付き出ている。
俺よりも強い化物がここにいたことに震えながらも戦った。勝ち目のない戦いだったが捨て身、そして周りの兵士たちを利用した戦法によって俺は奴を倒した。いや実際には吸収した。正直何が起こったのかは今でもわからない。
だが、おかげで俺は以前よりはるかに強くなった。そして同時に俺の生きる目的ができた。
別に奴に意識を乗っ取られたわけではないし、死んだ兵士に影響されたわけでもない。だが、死を目前とした戦いで俺は俺自身の目的のために動くことを決意した。

俺は奴を倒したことにより国王による式典に招待されることになった。
奴を吸収したおかげで人外になった俺は魔力と肉体が奴の羽根のような形になった。
羽根の効果は俺の望んだとおりになった。ある時は根本の棒のような部分がストロー状になりそこからゼリー状の携帯食料が吸えたり、回復用の注射として使ったりとずいぶん便利になった。緊急回避として全身を羽根にしたり、魔力で翼を使って飛行したりと戦闘においてもうまく使えるようになった。

ある程度羽根の力に慣れてきた俺は行動を開始した。
まず資金集めを兼ねて奴隷専門の商人を何人も襲った。裏通りを歩けば奴隷商人など掃いて捨てるほどいるので、その中でもずいぶん儲かっている奴らをターゲットとした。
奴隷ならば、親に売られ居場所がないものもいるはずだと踏んだが大成功だった。
手に入れた資金を元手に彼らの面倒を見て鍛え上げる、それと同時に今の政権に不満を持つものを徹底的に調べ上げた。

その間情報屋を買収し、買収に失敗した奴は消した。そして平民から貴族まで今の生活に苛立ちを持っているものに今の王国の不正を教え無意味さを説いた。
貴族には金をやると焚き付け、断れば奴隷を買ったことをばらすと脅した。飴と鞭は無能な貴族共には最適なのだ。
平民は借金をチャラにしたり、金を渡したり、思想を植えたりすることによって味方に取り入れた。
だが貴族に接近したのは資金が欲しかったからであり、奴らには目的を果たした後は消えてもらった。　俺が中心としたのは最初の奴隷と平民だ。
奴隷は奴隷制度を許可する国家を憎んでるし、平民は金と平等を求めている。
この国の貴族はすでに金の亡者共と化している。そんな馬鹿どもよりも、信念を持つ奴隷や平民のほうがよっぽど信用できる。

俺は式典の日、作戦を実行に移した。
貴族と軍の上層部を使って警備員をすべて協力者にし、観客も招待状を持つものしか入れないようにした。
もちろん招待状を持つものも協力者だ。準備万端、全てにおいて抜け目はない。

◆◇◆◇◆

作戦は俺が国王を真っ二つにした時から始まった。
協力者たちは王女とその娘息子たちを殺し、そのまま貴族共を皆殺しにした。もちろん貴族の中には協力者もいるがそんなことは百も承知。俺はここでこの国の基礎をすべて破壊した。
そうだ、俺の目的は世界征服、まるで小説に出てくる魔王がするようなことを俺は実行しようとしている。

俺は国を作った。
不必要な人間を次々と消していき、政治の補佐と戦の補佐を選出した。
政治の補佐に軍の一般兵から発掘した【ロイ・ワークス】という男を。この男は話術や観察力に長けていたため、政治や話術を徹底的に叩き込んだ。公証人としてうまくやってくれるだろう。彼の下には同時期に話術などを教えた友人を入れた。彼らならば政治をうまく進めてくれるだろう。
戦の補佐には奴隷から【イブ・ブリュンヒルデ】という少女を。彼女を発見したのはいつものように商人を殺した後奴隷たちを檻から出し始めた時、彼女は自分が檻から出た途端に俺に襲い掛かってきた。その時の目に俺は一瞬だけ恐怖を抱いた。生への異常な執着、俺はその時彼女を側近にすると決めた。その後、指揮官としての頭脳を鍛えながら、剣と魔法の訓練をひたすらつづけた。今やこの国で俺の次に強いくらいだ。彼女の下には下心満載の馬鹿どもではなく、同じ年頃の少女たちを入れた。こちらも俺が鍛えた者たちだ。特に問題は起こさないだろう。

その後俺たちの国はうなぎ上りで成長し続けた。魔物を支配下に置くことに成功し、支持率は目標の１００％を維持し続け、他国を次々侵略していった。

そしてついに念願の世界征服を成し遂げた。
国民は平和に暮らし、植民地の国民も不自由なく暮らしている。
敗戦国の馬鹿貴族共が悔しがっている姿を想像すると、笑いが止まらなくなる。
自他ともに魔王（数えきれない死を生み出した俺は自分をそう呼んでいる）と呼ばれる俺は、今何一つ不自由なんてなかったはずだった。

まさか平和が俺にあんな苦しみを与えるとは、その時思ってもいなかった。

プロローグ3「俺の心は震えていた」

俺の名は【ゼロ・ナルノート】、魔王と呼ばれこの世界の頂点に君臨している。

今俺がいる場所は謁見の間と呼ばれる場所だ。普段は政府の大事な決め事をしたり、国王から上層部への発表だったりとあまり使われていない。

俺は赤い刺繍が施された金の椅子に座っている。

俺の左には白い正装を身にまとったロイがいる。ブロンドの髪にブルーの瞳、顔も整っている上にクールな性格でかなりモテるらしい。

右にいるのはイブ。シルバーブロンドの髪を腰まで伸ばし金色の瞳を持つ一見どこかのお嬢様のような彼女は胸、腰、肩、膝から足元と銀の細身の鎧をつけている。背負った銀色の大槍を振るう姿から『白銀の悪魔』と呼ばれてるらしい。

俺から見て右には軍の隊長たち、左には大臣たちが真ん中のレッドカーペットを挟むように並んでいる。そしてレッドカーペットの上には縄で拘束された勇者一行とがたがたとおびえる二人のおっさんがいた。

「ではこれより陛下に牙を向いた愚か共の刑を決め、実行に移す」

ロイが手元にあった資料を読み始める。

「まず左の者たちは、愚かにもこの城の正面から堂々と入ってきた自称勇者一行だ。彼らは見張りの兵を倒したのは良かったものの、その時点で疲労し逃げようとしたところを野スライムに倒されたスライム以下の雑魚たちだ」

勇者がこちらを睨むが全くと言っていいほど迫力がなかった。
勇者一行は勇者（男）、戦士（男）、魔法使い（女）、僧侶（女）と某ドラゴン退治のゲームのようなパーティーだった。
正直、見張り兵自体があまり強くはないはずなので彼ら見かけ倒し、つまり弱いということだ。スライムに負けたなんて俺だったら恥ずかしすぎる。
そして思わず皆から笑い声が漏れる。それは「クスクス」から次第に膨れ上がり「ガハハハハ」と大爆笑になってしまった。
勇者と戦士が赤面しているが、魔法使いと僧侶は別の意味で赤面している。
ロイの3回目の咳で笑い声は収まった。

「右の二人は陛下の家臣でありながら自分たちの主の暗殺を企てたバカどもだ。金に踊らされた彼らは陛下を亡き者にするというまさしく絶対に不可能な行為を企てた。その凶器が……」

ロイは部下から何かを受け取るとそれを上に掲げ叫んだ。

「このバナナだ」

全員が唖然とする、まあ当り前だろう。俺も自分をこれで殺すことができると奴らが信じてるとは思ってなかった。

「奴らはあろうことかバナナを廊下に置き、それで陛下が転び頭を打って死亡すると考えたのだ！　この程度で陛下が死ぬようならばこの国はとっくに終わっている！」

ロイの説明を聞いた幹部たちもバナナが出た時から我慢していたのだろう。部屋全体が大爆笑の渦に包みこまれていた。あろうことか勇者たちまで笑っている。

全く、死刑になるかもしれないのに暢気(のんき)なものだ。

「では、彼らの刑の審議を始める。意見があるものは挙手せよ。話し合いをしてもかまわない」

ロイが資料を部下に渡すと皆が話し合いを始めた。

「陛下を亡き者にしようとしたのだ、死刑に決まっている」

「まず奴らの元を探り出すべきであろう。すぐさま拷問を開始すべきだ」

「だが外交問題になったらどうする？　これが原因で他の国まで騒げば面倒なことに……」

……正直つまらなすぎる。

こんな貧弱な勇者を送ってくる国も所詮はクズだろうが、暗殺にしてもバナナってのはなぁ……やられる側の気持ちも考えてほしい。バナナで殺せるなんて俺、そんなに弱く見られてんのかよ。

俺はそんなことを考えながらここに入って初めて口を開いた。

「どちらもクズに変わりはないが勇者たちは２０歳にもなってないガキどもだ。召し使いとしてここで働いてもらう。そこの年寄どもに未来はない。カスになってもらおう」

カスの単語が出た瞬間部屋中の人間（俺、ロイ、イブ、勇者一行依を除いて）がびくっと震えた。

「い、嫌だ！　カスだけはやめてくれ！　俺の首を切ってくれぇ！」

突然おっさんが叫び始めた。それに死を免れ安心した勇者たちはリアルにビビった。

ちなみにおっさんは二人組。もう一人はというと……泣いてました、号泣。代の大人が情けないったらありゃしねえ。

俺は自分の魔力の塊を掌（てのひら）に出した。それは2つの赤い羽根だった。

その羽根を兵士が受け取ると、暴れるおっさん共を押さえつけ、その羽根の根本を彼らの肩に突き刺した。

羽根がおっさん共に吸い込まれるように入っていくと2人は――

――狂った。

「「あああああああああああああああああああぁぁぁ！！！！」」

おっさん共は自らの体をひっかきながらその場で転げまわった。勇者一行は怯えた顔で見ていたが、使用人たちに外に連れ出された。

周りの大臣たちは床で転げまわる元同僚を軽蔑した目で見る。

そしてその光景を目の前にした俺は、

「俺を裏切った罰だ。最大級の苦しみを味わい、狂い死ね。貴様らの中に裏切り者がいるならば今のうちに言っておこう。こうなりたくなければ今のうち名乗り出ろ。自分は裏切り者です、と泣いて謝るなら命だけは助けてやる。以上、解散」

そう言うと俺は立ち上がり部屋を後にした。

◆◇◆◇◆

俺が城の中を歩けば誰であろうと王だと気づく。それは俺の姿が特徴的なのかもしれない。

全体が黒色で白と赤のラインがあるジージャン（ジーンズみたい

な素材のジャンパー）に灰色に黒のラインの入ったズボン、左目には黒い眼帯、そして何より目立つのが俺の髪。前髪は赤なのに後ろ髪が黒の少し肩に髪が掛かるくらいのとげとげ頭だ（あの鳥を吸収したらこんな髪になった）。剣山みたいな髪形ではないということだけ注意しておこう。顔は少しは整ってると思う。

俺の肉体はあの鳥を吸収してから成長が大幅に緩やかになっている。

つまり15歳からそれほど年を取ってないってことだ。この体が一番動きやすいとでも考えたのだろうか。やろうと思えば成長もできるのだが面倒なのでやらない。

俺の姿を見たやつらはすぐさま礼をする。まあ後ろに銀髪美少女と金髪イケメンを引き連れていれば十分目立つが。

俺たちは何気なく城内を散歩していた。別にやることもないので目の前の黒い穴に……？　黒い穴？

「な、何でしょうか？　魔法か何かの類では……って陛下！？」

「おお！　本当に穴だ」

俺の前にあるのは直径1メートルほどある黒い円だ。

俺は屈みこむと中に手を入れてみた。すると待ってましたとばかりに円が大きくなり俺を中に入れた。

「「陛下！！」」

二人は俺を引っ張り出そうとしたようだが黒い穴はそのまま、全員を飲み込んでしまった。

俺はあの時、黒い穴を見た時、何かを感じた。その何かは分からないがこれだけは言える。

この穴の先に俺を呼んでいる奴がいる、そしてそいつは俺から暇を取り上げてくれる！

そんな期待から俺の心は震えていた。

穴の先にあるものに期待を寄せながら、俺は落ちて行った。

第一話「パラシュート無しのスカイダイビング」

転生した主人公の登場シーンは様々だ。

空から落っこちる、赤子から再スタート、気が付けば森の中などがメジャーなところだろうか。だがいずれも苦労の山なのは確かだ。

空から落っこちれば死を覚悟しなければいけないし、記憶のある赤子なんてものは羞恥プレイのオンパレード、森での生活なんぞ死亡フラグ立てまくりだ。

つまり何が言いたいかというと「転生して新しい人生なんて俺さいこぉおおおおくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」なんて調子に乗ってはいけないということだ。

しかしながら異世界から人間をゲット！　そして勇者や魔王という半永久的なおめでた重労働をしてもらうなんて時に使う『召喚』は、転生とは違う場合もある。

城の一室にたくさんの人に注目されながら出てきたり、美少女巫女の失敗で森の中に放り出されたり（転生の例と同じと思ったあなたは目を閉じましょう）と、やられた人は傍迷惑だったりチートもらってヒャッハー！　なんて思う人も叫ぶ人もいるかもしれない。

さて、なぜこんな長ったらしい転生だの召喚だの説明をしているかというと、俺が今それらしきものに掛かった、と言えば分るだろうか。

もっと簡単に説明してみると、黒い穴にダイブ→部下二人が消えた！→パラシュート無しのスカイダイビング……お分かりになられただろうか。

「さて…どうしよ――――」

まさか考え中に落ちてしまうとは……当たり前か。説明している間にも落ちているのだから仕方ないと言えば仕方ない。

ゆっくりと目を開け、起き上がると俺の周りには馬鹿でかいクレーターができていた。なぜ落ちても無事なんだ！？　なんて疑問は当然スルーさせてもらおう。
クレーターの外は木、木、木。どうやら俺は森に落ちたようだ。
体に支障は無いか確かめるため、左手を右肩に乗せ、右肩をぐるぐる回し始める。目をゆっくりと閉じ意識を集中させると、いきなり目を見開き、両手を広げる。そのまま地面を思いっきり蹴ると、次の瞬間にはクレーターの外に出ている。
肉体強化の魔法はうまくいったようだ。
特に異常はない。体内の魔力、筋力、全て安定してる。左目にそっと触れると、いつも通り黒い眼帯に包まれている。どうやら俺自身に異常はないようだ。
ほっと一安心し、俺は森を歩いてみることにした。

◆◇◆◇◆

アノン王国アノン城、その場内は今大騒ぎです。あ、失礼しました。私は【リリア・クウォーク】といいます。この大陸に3人しかいない巫女の一人です。
巫女というのは、魔王と呼ばれる悪しきものを倒す勇者様をこの大陸に呼ぶことができるんですよ。そうです、私こう見えてすごいんですよ、エッヘン。
でも本当に勇者様を呼んだのは、大昔にたった一度だけ。その時の巫女様は私のおばあ様のおばあ様なんです。
それ以来誰も勇者様を呼ぶことができず、私も毎日のように召喚術の練習をしていました。
でも今朝いつものように召喚術をしていたら、なんと！　光の中で「勇者？　いいよ」なんて声が聞こえたんです！
そのあと城の近くの森からとっても大きな音がしたので急いで王様に報告したらすぐ確認に兵を向かわせるって言ってくれました！

これで勇者様が本当に現れたら私、2番目の召喚術成功者ってことになります。それってすごい快挙なんです！　すごすぎです！

はあ…まだかな私の勇者様……。

◆◇◆◇◆

「……！？」

な、なんか寒気が。気のせいだといいが…。

あの後森の中で三つ目のクマとか1メートルはある蜂とかに襲われたが、俺に目を付けたのが運の尽き、今は俺の腹の中で永遠の眠りについている。蜂は珍味だった。

今は魔力で作った片手剣〈クウケン〉を腰に差し森を散歩している。

俺は基本武器を持たない。俺の武器はいつも魔力で作られている。このクウケンは片方にしか刃がないいわゆる刀と呼ばれる武器だ。刃は赤色、反対側は黒色、鍔（つば）は無く、外見は直角三角形になっており、刀身は1メートルぴったし。鞘などはなく鍔あたりの部分がベルトの側面にくっついている。

しかし……歩いているうちにふと思ったんだが、人、冒険者の姿が見当たらない。

ここがどんなとこかなど知らないがあんな化け物（3つ目のクマとか）がいるのだから冒険者の一人や二人、会ってもおかしくないと思うのだが。

とりあえず意思の精通ができるやつにあって、いろいろ教えてもらわなければいけないし。

そんなことを考えていると、人の気配が。だが、あいかわらず俺の人生うまく進まないようだ。

（俺をつけるとは、いい度胸だな）

心の中で苦笑いをしながら、クウケンのグリップに手をかける。体全体に強化魔法をかけ終えると同時に、俺は振り向いた。

追手はすぐ木の後ろに隠れたが、バカどもめ、バレバレだ。

俺は一気に追手の一人が隠れている木に近づくと、クウケンで木を切り倒した。

「ちっ！」

追手は右に飛び倒れる木を避けたが、その時点でアウトだ。俺は強化された右足で、追手の背中を踏みつけた。胃液を盛大に吐き出しながら追手は倒れた。もちろん殺しはしない。気絶しているだけだ。

さて、追手の数は残り二人。せいぜい楽しませてもらおうか。

第二話「世界が俺を待っている！」

さて、二手に逃げる追手たち。両方捕まえるにはどうすればいいだろうか。

昔から〈二兎追うものは一兎も得ず〉、なんていうがそんなものは関係ない。

俺は欲張りなんだ。二兎だろうが百兎だろうが、俺が獲物と判断したからには無事ではいられないと覚悟したほうがいいだろう。

〈クウケン〉を右手で握り、俺は追手の一人の左隣に移動した。

肉体強化の魔法は、クウケンのような創造系の魔法と同じくらい頻繁に使う。

相手も肉体強化系の魔法を使っていたようだが、俺から言わせてみれば「これだからゴミは…」と嘆いてしまうほど低レベルだ。おもわず以前来たの勇者を思い出す。

「なっ！」

「ちっ！」の次は「なっ！」か。全く、ひねりがない。せめて「ひでぶ！」とか「あべし！」とか言えば面白味があるのだが…。

なんてくだらないことは置いといて、俺は奴の隣まで一瞬で近づくと足をひかっけてやった。

転びそうになるのを奴は前転のような体勢で地面を転がりすぐさま起きた。そして俺を前にボクシングスタイルで構えた。

改めて奴を見ると全身緑色の迷彩服。手袋、靴も同色で、顔は目だけが出るマスク、これまた同色とまるで忍者のような姿だ。

そして右手には、どうやら雷系の魔法を使用しているらしい。青白い稲妻が右手を発光させている。

「少し眠ってもらうぞ」

そういって右ストレートを放ってくるが、ずいぶんと大振りだ。
「かっこつけたセリフ言ってる暇があるならさっさと殴りかかって来いやボケ！」と文句の一つも言いたくなるのだが、ここは我慢我慢。
奴の懐に入り込むように右に体を落とすと、左アッパーを腹に決めてやった。案の定胃液と思えるものを吐き出しながらかっこつけ野郎は倒れた。

追手はあと一人、そいつを追いかけようとしたが…やめた。
最後の一人だがそいつはもうすでに俺に襲い掛かってきた。
なかなかいい不意打ちだ。
今の俺には振り向く暇もないだろう。
右手に握られたナイフが俺の後頭部に刺さる。その瞬間――――――俺は大量の羽根となった。

「は？」

奴が地面を転がるころには、俺は元の姿に戻っている。
今のは俺の肉体を羽根に変えた、ただそれだけなのだが敵の攻撃を避けるのに素晴らしく役に立つ。
魔力と肉体を羽根に変えることができるからこそ、武器を作ったり、羽根になって緊急回避したりなんてことができるようになるのだ。俺にとって、唯一無二の最強の力だ。
だが相手もまだあきらめてはないようだ。
すぐに立ち上がるとナイフで俺に切りかかってきた。
しかし、最初の奇襲が失敗した時点でコイツの負けは決まっている。
俺はクウケンを消すと、奴のナイフを持った右手の手首を左手でつかみ、引いた。奴自身の押す力を利用して右足で左足を引っ掛け

てやる。そのまま俺は左足を軸にして左に奴を引き倒す。
そして股間を踏みつけた。もちろん全力ではない。本当だ。
「はぎゅう！」
情けない声を出し失神。白目をむきながら盛大なお漏らしをしている。代の大人が…クククッ。
三人を一か所に集め、それぞれの持っていた拘束用の縄で縛りつけた。

◆◇◆◇◆

一通り作業が終わったころには、お漏らし以外の二人が目を覚ました。お漏らしが醜いのは、彼の後の人生を考えてあげて無視してあげよう。
「な、なんじゃこりゃあー！」
「んなっ！」
うるさいなぁ、と言いながら奴らを見る。
全裸。そうです、全裸になってもらったんです。武装解除にはこれが一番だ。…ちなみに俺は断じてゲイではない。
しかし女性に興味があるわけでもない。恋愛感情なんてものはとっくの昔に壊れてしまったのだろうか。
辛気臭い話はここまでにしよう。
とりあえず忍者スーツ的な服一式を手に入れた。
これがまた便利で、実は緑の迷彩柄ではなく、真っ黒なまさに忍者スーツだったのだ。肝心の機能は、周りの風景に溶け込むことができる色彩変更可能な特殊スーツだった。
これならば某鉄の歯車の主人公、ス〇ークのごとき潜入ができる

かもしれん。
スーツは拝借させてもらうとして、彼らにはいろいろと聞きたいことがある。
俺は兵士どもを見据えると、羽根を一枚作り、右手で握る。

「な、何だよ…」
「ひ、ひいぃ」
「（ぴくぴく）」

怯える彼ら（一名ダウン）の中で、失神しているお漏らしの元まで行くと、羽根の根本を額に刺した。

「はぴゃん！」

人として人生でなかなか口に出さないであろう言葉を叫ぶと、お漏らしは眠りについた。
俺は奴の額から羽根を抜くとさまざまな角度から見始める。そして、羽根の上半分を真っ二つに折った。
上半分を捨て、下半分となった羽根を俺自身の額に当てる。すると…お漏らしの記憶が頭の中に入ってくる。…別に奴がお漏らししした時の記憶ではない。
今回使った羽根の効力は記憶の複製。もちろんやられた本人は記憶を失うことはないし死にもしない。
今はただ眠ってるだけだ。永眠ではないのでご安心を。
ちなみに羽根は状況によって硬度を変えることができる。注射みたいなときは硬く、全身羽根化の時は羽毛のような柔らかさだ。

奴の記憶からは結構な量の情報が手に入った。
まずここはアノン王国、アノンの森。…聞いたことないな。
それは置いといて、こいつらはグレイブ軍事帝国とやらの特殊潜

入暗殺部隊らしい。
昔はグレイブとアノン、両国家は仲悪かったらしいが、今はお互いいやいや手を組んでいるみたいだ。
その原因となっているのが魔王。しかし俺とは違うようで魔族の王らしい。俺は魔法という力で世界を制したので魔法の王、魔王。この世界の魔王が血筋なら俺は実力といったところか…。まあこっちの魔王とやらも、いくつもの国をビビらせているんだから相当強いんだろう。

ここで俺は理解した。
ここは異世界だと。
俺の全く知らない国。
俺とは違う魔王。
そしてありがたいことにこの世界にもちゃんと魔法があるというではないか！
原理は元の世界と全く同じというのも嬉しい限りだ。
未知の世界、未知の魔王、俺の期待がグングン高まる！
元の世界は俺がいなくとも何とかなるだろう。
ロイとイブはおそらくこの世界にいる。
この世界には魔王を倒すべく、異世界から勇者を召喚する巫女という女性が三人いるらしい。
一人はアノン、一人はグレイブ、もう一人は魔王に襲われたらしく、現在行方不明らしい。
俺に巻き込まれてロイたちが来たのならもしかしたらほかの巫女の所にいるかもしれない。
とりあえずアノン王国の巫女にあってみよう。それで何か分かるかもしれない。
さあ！　この世界で新しい一歩を踏み出そう！　世界が俺を待っている！

「あの～俺たちは？」
「もちろん放置（全裸で）」

第三話「取調室名物汚物サンド」

お漏らしの記憶をもとに、俺は森を抜けることにした。
ほっとけば彼らも誰かに見つけてもらえるだろう…たぶん。
過去を振り返らず明日を生きる、それが俺のスタイル。…自分で言って馬鹿らしくなってきた。

◆◇◆◇◆

身体強化の魔法を使い森を突っ走るとやっと町についた。
あの西洋風のデカい城が巫女のいるアノン城か。俺の城と比べると少しばかり小さいがこの世界では大きいほうなのだろうか。
とりあえず町に入ろうと足を進めると、入口に列ができていた。どうやら検問が敷かれているようだ。
兵士たちが森に入っていくのを見ると何かあったのだろうか。
あ、俺か。そういえばここに来るときに森に落ちたな…クレーター作ったし、その時の音で勇者が森にいるとでも思ったのだろう。そしたら俺、森に戻ったほうがいいんじゃね？
お漏らしたち全裸だし、見つかって変なこと喋られたら少し厄介だな。
検問が俺の番になったが俺はUターン、森に戻ろうとしたが、どうやら兵士たちは後ろ暗いところがあるように見えたらしい。

「おい！　お前！」

自分が呼ばれてることが何となくわかったのでいやいや振り返ると、兵士の一人が俺の肩に手を置く。

「少し話を聞かせてもらおうか」

そうだな…こいつらについて行ったほうが、速く巫女に会えるかもしれんな。そう考え俺はコイツの後について行った。

◆◇◆◇◆

「で？　金も武器も何も持たずにどうしたの？　どこのお坊ちゃん？」

肩肘をついてそんなことを言い出す兵士。今は取調室のような場所にいる。俺とコイツ二人だけだ。

「残念ながら俺はただの一般市民だカス」

「へえ、面白い語尾じゃねえか坊主」

眉をぴくぴくさせながらこちらを睨みつける兵士。こんなことに時間を取ってる暇なんてこっちにはないんだがな。

「よく言われますカス野郎」

漫画だったら血管マーク浮きでまくりの顔、ゆでだこに近いな。

「マジで殺すぞ」

「顔が引きつってるぞカス野郎。俺のような善良な一市民は汚物が近づくと悲しくなってくるんだカス野郎。こんなかわいそうな存在がこの世に入るのだろうかと。とりあえず鏡見ろ汚物。話はそれからだ」

「こいつマジで殺す！」

そういって汚物は剣を引き抜いた。我慢強さが足りんな、しょせ

んは汚物か。

「善良な一市民に剣を向けるのか汚物」

「ははっ、心配いらねえよ。善良な一兵士の俺は取り調べ中突然襲い掛かってきた少年を止むおえず斬った。貴族ならともかくそこらのガキだったら問題にもなりゃしねえよ」

俺の忠告に汚物は汚らしい笑みとともにそう答えた。

貪欲な目、腐りきった根性、こういうカスがどの世界でも存在している。

貴族だろうが農民だろうが関係なくカスは自分の保身のためにしか動かない。こんなカスは片っ端から削除してったほうがいい。だが消しても消しても、カスというのは完全には消えないのだ。

「なあ…」

「あ？」

「俺は痛さと恥ずかしさ、精神的にきついのはどちらかといえば恥ずかしさだと思う」

さすがは汚物、俺の言葉が理解できてないらしい。教育の大切さを実感してしまうな。

「俺は平和的な仔羊なんだ。非人道的なことは俺にはできない」

「それがどうし――――」

その先の言葉は言えない。なぜなら俺が机を強化した足で蹴り飛ばしたからだ。飛んでいく机は汚物を壁に叩きつけ、見事なサンドウィッチにした。取調室名物汚物サンド出来上がり。

だがやはり馬鹿でかい音は他の兵士を呼ぶ。勢いよく扉が開くと青ざめた顔の兵士が一人。

ここで叫ばれるといろいろとまずい、そう判断した俺は先手必勝で一言。
だがどんな言葉がいいだろうか。兵士の注目を汚物から俺に向けるための一言。
そうだな…

A、汚物を指差し「この人痴漢です」
B、俺を指差し「俺勇者です」
C、来た兵士に向かって攻撃しながら「近接戦闘はCQC！」

さて、どうしよう。誰か決めてくれるとありがたいんだが、あいにく今は誰も頼れん。
Aはだめだな。インパクトに欠けるし、いきなりすぎて相手が理解できないだろう。
BはAと同じことになる気がするが…
C、何がやりたいんだ俺は？　余計問題になるだろうが。
よし、決めた。Bにしよう。

「俺――――「敵襲だぁぁぁぁ！！」…聞けよ」

どうやら相手はこちらの都合を考えてはくれないらしい。仕方ない、俺もあまりしたくはなかったんだが、これも運命、諦めよう。
兵士が腰に下げた剣に手を掛けようとした瞬間、俺はその手を捻りあげた。この程度の距離なんぞ魔法を使わなくてもすぐ縮められる。

「いだだだだっ！」

痛みで涙目になっている兵士から手を放し、すぐさま右手で相手の右肩をつかむ。そしてコマ回しのように半回転。背中を向けたが

最後。右腕は締め上げるように相手の首に、左腕は右手の甲に重ねるように添える。

これぞ首絞め柔道ＣＱＣ！　そして俺は一言。

「近接戦闘はＣＱＣ！」

ナイフを首に突き付けられた兵士の小さな悲鳴とともに、俺の兵士攻略戦がスタートするのであった。

なんか王道を全速力で逆走してる気がするのだが…気のせいか。

第四話「変態さんよりはマシかと…」

勇者とはなんだろう。
魔王を倒す正義の味方？
勇気の塊（かたまり）？
フラグ一級建築士？

時代や世界によって一人一人違うだろうが大体はこれらに当てはまるはずだ。
悪を倒すためにどんな困難にも立ち向かう。
武器を片手にバッタバッタと悪をなぎ倒す。
悪を許さない鉄の魂（たましい）で茨（いばら）の道を突き進む。
俺は今まで八人の勇者を目にしたが、性別や年齢が違くとも皆勇者にふさわしい信念を持って俺の前まで来た。
だからこそ戦っても殺さず、城で働かせたり、説得したり、必ず命は奪わなかった。
やはり俺は純粋な正義は生きるべきだと思う。
たかが俺を殺そうとしたくらいで、そんな貴重な資源を捨てるのは非常にもったいないと思う。
勇者について熱く語ったところで本題だ。俺は一応、勇者としてこの世界に召喚させられた可能性が高い。実際俺自身は、いまからでも勇者になろうかなと思うくらいだ。
そんな勇者志願者がなぜ…テロリストまがいの行動をしているのだろう？

実を言えば俺は今、一人の兵士の首に手をまわしナイフを突き付けているのだ。
左手に逆さ持ちしているのは〈ジャック（切り裂きジャック）ナイフ〉。
〈クウケン〉と同じく俺の創造魔法で作成されているため、必要

なとき作り出し、戦闘が終わればすぐ消せるかなり便利な代物となっている。普通に武器を携帯する必要もなく、いちいち研ぐ必要がないため、創造魔法は俺にとってなくてはならない魔法の一つとなっている。

ジャックナイフは片方にしか刃がなく、小刀に近い。１５ｃｍの紅の刀身と５ｃｍの漆黒の握り（グリップ）、鍔（つば）はなく刀身は非常に薄い。盾や鎧を叩き斬る、なんて豪快なまねはできない。だが、鉄塊を豆腐のようにスムーズに切るこのナイフは、弱点への一撃で敵を葬る（腕力は必要です）。まさに暗殺のような状況にぴったりのナイフなのだ。

そんな恐ろしいナイフを突きつけられた兵士は、鼻水で汚くなった顔をがたがた震わせ俺に押されている。よし、あだ名は鼻水で決定だな。

取調室から出ると廊下に出た。

木でできたこの観測所は城門の裏にあるため、騒ぎが起きれば城門で検問をしている奴らも駆けつけてくるだろう。

今いる取調室の隣にはもう一つの取調室がある。しかし今は誰もいないようだ。

今いる場所から右にまっすぐ行くと外に、左に行くと階段があり、おそらくその上に仮眠室がある。この観測所の入り口には兵士が二人立っていて、どちらも武装している。俺の予想ではこの観測所の入り口の監視も含め、ここにいる兵士は六人。検問の兵士は相手にしないつもりだ。今回の目的はこの六人を殺さず、捕縛することに決定だな。

「そうと決まれば…」

鼻水は必要ないな。ナイフを口にくわえると右手に力を籠め、首を絞める。

「あ、あがが！……（ガクッ）」

鼻水を気絶させると取調室へ運び、汚物ともども彼らが持っていた縄で縛りあげた。

そのまま階段を登り扉の隣の壁に張り付く。聞き耳を立ててみると、どうやらぐっすりのようだ。

音をたてないように、静かに扉を開くと2人の男がそれぞれのベッドで眠っている。

とりあえず汚物たちと同じように縛り上げ、同じ場所にポイした。身体強化の魔法があれば、大人二人を運ぶことなど全く持って苦労しない。

さあ、これで最後だ。観測所の入り口に立ち、扉を開け放つ。そこにいる兵士の後頭部に一撃を当て気絶させる…はずだった。

そこにいたのは少女だった。長いウェーブのかかった緑の髪と、同色の瞳。巫女服という一部のマニアには圧倒的な人気を誇る服を身にまとっている。イブより少し小さいくらいの背丈の、小動物を思わせる少女。

「ほへ？」

なんともあほっぽい驚きの声、だが今注目すべきはそこではない。目を丸くする巫女服少女、拳を振り上げ左手にはナイフを持っている俺。はたから見たらすぐ通報しなければならないこの状況で、俺の頭は瞬時に判断した。

（兵士はこっちを見てない。今叫ばれると面倒なことになる。今すべきことは…）

「あ、むぐっ！」

少女が何か喋ろうとするのを防ぐため、その記者な腕を引っ張り、抱き寄せた。一見とんでもなくうらやましい光景だろうが、疚(やましい)しい気持ちは一切ないぞ。本当に。

そのまま扉を閉め、大きく後ろに飛ぶ。兵士たちは気づいては無いと思うが警戒はとかず、ジャックナイフを腰に下げる。

さてこれからどうし……巫女？

この少女、確かに巫女服を着ている（性格には巫女装束だったか）。正直巫女の知識などほとんどない俺だが、この少女が来ているのは間違いなく巫女服だ。真っ赤な袴、染み一つない白衣(しろきぬ)。

見張りの兵士たちの丁寧な反応から見て、おそらくこの少女こそ巫女。

抱くのをやめ、？マークを浮かべる彼女に、

「今から俺の質問に答えろ。声は絶対に出すな」

とだけ言い、うなずく彼女に質問を始めた。

◆◇◆◇◆

今日の私は浮かれてました。

勇者様を召喚したことで有頂天になってました。

調子に乗って検問の様子なんか見ようとした私がバカでした。

でも、今頃反省したって遅いんです。なぜならもう事件は起きているから。

そう、それは私が観測所に入った瞬間におこりました。

私が予想だにもしなかった事件、それは……まさか、いきなり抱かれるなんて！

普通誰が思いますか！

扉を開けたらいきなり抱かれるなんて！　それも見ず知らずの人に！

これでパニックにならないほうがおかしいですよ！
え、抱かれた感想？　そ、それは、まあ、よかったですよ。温かくてほんわかしてて、本人みたらすっごいイケメンで、って何言わすんですか！
それはともかくイケメンさんは私に、質問に答えろって言いました。
私の顔が真っ赤になっていないか心配ですけど、とりあえず答えるしかなさそうです。

「お前……巫女か？」

そうです！　私、巫女なんです！　とは答えられないので、うなずくことにしました。別に隠すことでもないですしね。

「今日、勇者の召喚に成功したか？」

な、何ででしょう。勇者様の召喚に成功したっていう話は、まだどこにも知らせてないはずなんですが…。
でも、その通りなのでまたうなずきます。
わ、私これからどうなるのでしょうか。
やっぱりこの男の人にあんなことやそんなことを…。
初めてなので優しくしてほしいです。
べ、別にこの人ならいいかもとか思ってませんよ！　でも変態さんよりはマシかと…
これからの事で頭を抱える私に、男の人は落ち着いて一言。

「よし、城に案内しろ」

へ？　今なんと？

第五話「俺の目の前に広がったのは――――カオス」

今、俺の前には摩訶不思議な世界が広がっている。
異世界トリップとは別の意味での衝撃、見たくはなかった光景といってもいい。
一つづつ説明を始めようと思う。
まず最初に、全裸の男・下着の女。
……謝るから戻るボタンを押さないでくれ、ホント。
ごほんごほん、話を戻そう。
まず目に入ったのは全裸の男。鮮やかなブルーの髪と瞳、引き締まった体の渋い男…だったであろう顔立ち。ｏｒｚのポーズでありながら頬が上気しているのは、気温が高いせいだと思いたい。
もう一人、下着姿の女は、空色の髪と瞳の美女なのだが、頬は上気し、目はうつろだ。男の尻を踏みつけながら、手に持つ鞭で床を叩く。まるでＳＭプレイを見ているかのような…嘘はいけないな、これは正真正銘ＳＭプレイだ。しかも悲しいことに、この部屋は王の私室だというではないか。は、ははは…笑えねぇ。

◆◇◆◇◆

さかのぼること数時間前――――

あの後巫女にこれまでの経緯を話すと、城に行くことになった。
やはり俺は勇者として召喚されたらしく、何やらいろいろ面倒なことが山のようにあるらしい。
そのためにもまず城に行かなければならないとのこと。
これからこの世界で動くことを考えると、勇者の肩書は案外役に立つかもしれない。
そんなことを考えながらアノン城に向かった俺と巫女。

ちなみにおねんねしてる優秀（笑）な兵士どもには、自分たちで何とかしてもらうことにした。まあほっとけば何とかなるだろ。ならなければそれまでだ。

城に着くまでは良かったものの、やけに広い謁見の間で待つことになった。

だが、国王がいつまでたっても来ないうえに、大臣やら将軍やらにじろじろ見られるというまるで俺を挑発しているかのような行動に、ついに俺の堪忍袋の緒が切れ…なかった。

俺も自慢じゃないが元魔王だ。ＴＰＯ（時と場所、場合にあった行動）は十二分に心得ている。

それに何も唯（ただ）ぼんやり待ってたわけじゃない。

目というのは感情を表しやすいものだ。

俺（勇者）にこの国の重鎮がどんな感情を抱いているのか、それが大体分かった。

見ただけだと分けられるのは３パターン。

本物なのかという疑いの目、敵対心剥き出しの目、そして俺自身の本質を見定めようとした目。

最初の目は気にすることは無い。俺や周りの動きでそれぞれ動くだろうが、まだ手は出さないだろう。　次の目だが、何かを仕掛けてくる可能性は大だな。もし消しに来るならば、俺が明るみに出る前に仕掛けてくるはずだ。勇者として明るみに出る前に消したほうが仕掛ける方としては好都合だろう。

だが俺は常に不意打ち対策として自動発動の〈緊急回避（ウィング）〉を自分に掛けている。そう簡単に俺を殺すことはできないだろう。となると次に標的になるのは俺に近い人物、今のところは巫女（リリア）だけだが、一人なら大丈夫だろう。危険視するべき人物はあらかじめ見（監視）ておく。

問題は最後、と言っても要注意人物は一人なんだが。

【将軍】、間違いなくただものじゃない。見た目は７０代前半の

筋肉質の老人。１８０くらいの長身、オールバックの白髪、右の眉から頬にかけてまでの切り傷が歴戦の戦士の面影を窺わせる。一見引退した老兵のような風貌、だが目の奥に潜む獣を俺は見た。強者を求め剣を振るい、戦場で〈快楽〉を見出す、いわば戦闘狂。そしてその獣の目が、残念ながら俺の本質の表層を見たようだ。にやにやしながら見られるというのは気分がいいものではないな。

国王に「自室には決して近づいてはならない」と言われているらしく、じゃあなんで待たせてんだよ、とおもわず言いそうになりながら、仕方がないので私室に向かった。もちろん国王のだ。周りが止めようとするのを無視し、道案内もとい道連れとしてリリアを引きずり無事到着。そしてそのままドアオープン。ノック？　何それおいしいの？

そして俺の目の前に広がったのは――――カオス。

◆◇◆◇◆

これはさすがの俺でも予想外だった。

誰が王様が自室でＳＭプレイしてるなんて想像できるだろうか。

案の定、リリアを見てみろ。あまりのショックに頭がオーバーヒートして湯気出てるぞ。

そして目の前の御二方（おそらく国王と王妃だろうが）も完全に停止している。誰も来るとは思っていなかったのは分かるのだが王妃さんよ、国王さんの尻に足を乗せたまま止まらないでほしい。こっちも悲しくなってくるから。

そろそろ話しかけようかと思った矢先、王女が動いた？　どさっという効果音とともに後ろに倒れたのだ。もちろん俺は何もしてません。

「ア、アンナぁぁぁ！！」

全裸の男、もとい国王が倒れた王妃のもとに駆け寄る。のど元に手を当て脈を測り無事を確認、一安心…とはいかず。俺とリリアのほうに振り返り一言。

「ど、どどどドアを閉めてもらえませんでしょうか！？」

びくっ！　と飛び上がりそうになるリリアの背中を押し部屋に入れ、扉を閉める。ていうか本当にコイツが国王なのか？

アイコンタクトでリリアに聞こうとするが、本人はまるで拾われたばかりの子猫のようにびくびくしている。

どうやら俺の想像以上にショックが大きかったようだ。いつの間にか服の袖を掴まれてた。仕方ない、とりあえず話しかけてみるか。

「失礼ですが、アノン陛下でしょうか？」

なるべく落ち着いた雰囲気を醸し出しながら聞いてみると、残念な返事が返ってきた。

「はひぃぃぃぃ！？」

か、会話が進まねえ…。ていうかビビりすぎだろこの国王。

さて、どうしたものか。何とか会話を成立させるため策を考えようとしたその時、扉が開いた。

第五話「俺の目の前に広がったのは――――カオス」（後書き）

あれ？　ストーリーが進んでないのは気のせいか？

第六話「手合わせという名の殺し合い」

「で、何のようだ爺（じじい）」

俺とリリアは現在、将軍と呼ばれる爺の部屋にいる。

軍の中では最高権限を持つ、いわば王の右腕のような存在らしいが、その私室にはコイツの性格が露見しているといっても過言ではない。

レンガ造りの壁には、剣を始めとしたありとあらゆる武器が飾られていた。2メートルを超すような大剣から、悪魔が持っているような先端が3つに分かれた槍、十字型のそれぞれの先端が剣のような形になっているかなり大きめの手裏剣など。だがそれらもすべて観賞用ではなく実践用なのだろう。

そこら中に飾られているのは、すぐにでも武器が取れる様にだろう。今でさえ一切の隙が感じられない。

「な、なんてことを・・・。勇者様、このお方はこのアノン王国で最強の剣士と呼ばれている将軍様なんですよ」

青い顔でリリアが言ってくるが、所詮この国の中の最強だ。戦って勝つ自信はある。

「まあ確かにあのへんた…じゃなくて国王たちを落ち着かせて、俺たちを救ってくれたことには感謝している。だがお前の部屋まで連れてこられる理由にはならないはずだ。何が目的だ？」

リリアが空気になじめず、「どうしようどうしよう」なんて慌てているが無視。

「グハハハハ！　儂を爺などと呼ぶガキなんぞ久しぶりに見たわい」
大口開けながら笑う爺。耳に響くからやめろ。
「じゃが威勢の良さに免じて質問に答えよう。一遍、手合わせしてもらえないかね」
さっきの馬鹿笑いから一転、妙に真剣な顔つきで手合わせを申し込んできた。
「…何でまた」
「ハッ！　この老いぼれの目はごまかせんよ！　謁見の間でのおぬしの目。まるで鷹（タカ）が狩るべき獲物を選別しているかのような動きじゃった。儂と目があった時も一切の怯みを見せず、逆に儂の実力を測ろうとするとは！　異世界から呼んだものなど頼りにならんと読んでいたが、まさかこんな大物が現れるとはな！　長生きはするものじゃな」
ほう、そこまで見ていたか。だが爺、理由になってねえぞ。
「すまない、今お前がほざいた戯言では理由になってないと思うのだが」
「ところどころ儂を馬鹿にする言動が入っているのだが…まあいいだろう。儂がお前さんと戦いたい理由、それは…」
ゴクッととなりのトt…じゃなくて隣のリリアが喉を鳴らした。
さて、この緊迫した場面でこの爺はどんな答えを出すんだ？
もし戦ってみたいから、なんていう戦闘狂みたいな理由だったら許さんぞ。

「無論！　戦ってみたいからじゃあぁぁぁ！！」

あは☆　何ふざけたこと抜かしてくれちゃうんだこの爺☆　マジブチ殺（はぁと）

「ゆ、勇者様！？　なぜ剣を片手に笑ってらっしゃるのですか！？」

ああ可哀そうに。

リリアちゃんが獰猛な犬を前にした子犬のようにプルプル震えているよ。

しかしここは少し危ないな。さすがに少女に怪我させるというのは心苦しい。

なんてったって俺は愛と勇気の戦士、勇者様なんだからな！―（元魔王）

そんな彼女を抱きかかえ…なんか変な声が聞こえる。もげｒ……気のせいか。

「はううぅ！　ゆゆゆゆうしゃしゃまぁ！？」

噛みまくりだがそこは無視。そのまま彼女を部屋の隅に連れて行ってあげる。

あれ？　出会って間もない少女を進んで助けるなんて、俺、勇者じゃね？

「ここでおとなしくしてろよ。じゃねえと怪我するからな」

若干顔が赤い巫女少女を背に爺に向き直る。

ほくほく顔の爺は先ほど飾られていた２メートルを超すような大剣を肩に担いでいた。

「待たせたな糞爺（くそじじい）。お待ちかねの殺し合（手合わせ）いだ。存分に楽しんで死ね」
「ガハハハハ！　強者との戦いほど心揺さぶるものはない。若造！　その自慢の勇者の力とやらを見せてもらうぞ！」

こうして手合わせという名の殺し合いが始まった。

◆◇◆◇◆

「ゆ、勇者様！？　なぜ剣を片手に笑ってらっしゃるのですか！？」

将軍様の一言にどうやら勇者様はお怒りのようです。
いつの間にか持っていた剣を、満面の笑みを浮かべながら握ってます。正直怖いです。
ううう、私はどうすればいいのでしょう？　迷いながら勇者様を見ると、目が合ってしまいました。
ドキッとする私をよそに勇者様は私を抱きかかえ…ってええええ！！　おおおお姫様抱っこです！
べ、別にすんごく嬉しいってわけじゃないんですよ！　小さいころお母様にしてもらっていましたけど久しぶりにされてびっくりしているだけですから！
何も勇者様の腕の中が暖かくて気持ちいとかじゃありませんからね！
ど、ドキドキなんてしてませんからっ！
そんな心拍数急上昇中の私を、勇者様は部屋の角に下ろしました。
か、顔赤くなってませんでしょうか。そんな小さなことが心配で、今すぐここから走り去りたいと思っている私に勇者様は一言。
「ここでおとなしくしてろよ。じゃねえと怪我するからな」

かああ、と自分でも顔が赤くなっていくのが分かります。
な、なんていうんでしょうか。顔がいいのもあるのでしょうが、それだけじゃなくて、満面の笑みじゃなくて優しさあふれる微笑み。
ああああ、うまく言葉にできません！　ひ、一言でいうならば…か、かっこいい。
いや、でも、惚れたんじゃないですよ！　かっこいいと客観的に！　客観的に感想を言っただけですからね！
で、でもこれだけは言わせてください。
「ががが頑張ってくだしゃい、ゆうしゃしゃま」
ううう、また噛んじゃった。

◆◇◆◇◆

「くたばれぇ！」
「ふんっ！」
ぶつかり合う二つの剣、そのままつばぜり合いになるが、剣の大きさからみてあちらの方が押し切りそうだ。
俺の愛刀〈クウケン〉の背に乗せていた左手をいったん離し、爺の腹を殴る。
しかし相手もそれを読んでいたらしく、〈クウケン〉ごと俺の身体を左に流す。そのまま大剣を右手だけで持ち、握られた左手が俺の背中を殴り飛ばす。
馬鹿でかい音を立て、壁が崩れる。
「どうした？　その程度か若造」
にやにやしながら壁に埋まった俺を挑発する爺。そうか、そんな

に殺してほしいか。

「まだまだ始まったばっかだぜ！」

弾丸のような速さで壁から飛び出ると、そのまま切りかかった。

爺は大剣で〈クウケン〉ごと俺を流し、斬るつもりらしく、左下から大剣を斬り上げた。その斬り上げの溜めの瞬間、懐に入り込むと〈クウケン〉を右に一閃。

それを爺は見事に避ける。服に少し掠（かすっ）った程度か。ていうかその反応速度は異常だろ。

「てめぇほんとに人間かよ！」

「ガハハハハ！　よく言われるわい。じゃがおぬしの速さも人外だと儂は思うぞ！」

そりゃどうも！と俺。

右薙ぎ、左薙ぎ、右斬り上げ、左斬り下し、左斬り上げ、右斬り下ろしを繰り返す。

だがその斬撃にジャブやキックを混ぜることで大剣のガードを潜り抜ける。

しかしなかなかうまくいかないもんだ。

ガードを潜り抜けた斬撃を奴は異常な反応速度でかわす。さすが戦闘狂。

だが避けるのにも限界がある。斬撃とランダムに組み合わされるジャブやキックを斬撃と間違え防ぐ。

そこに斬撃を入れれば奴は異常な速度で避ける。

しかしそこが限界のようだ。

その一瞬の隙に奴の腕と足に打撃を叩き込む。

本当に一瞬なので一発が限度。だが少しづつダメージを負う手足は次第に弱ってくるだろう。

スタミナが減り続ける中で、あんな大剣をぶんぶん振り回せばいずれ体力が底を着く。その隙をついて殺る、はずだったのだが。

「ガハハハハ！　儂のスタミナは無限大じゃぞぉ！」

「このバケモンがぁ！」

こいつマジで人間か！？　…仕方がない。少し疲れるがやっちまうか。

「どっせいぃぃぃぃ！」

振り下ろされる大剣を回転しながら飛び、かわす。

遠心力で〈クウケン〉を振るうがそれを爺は後ろに下がることで避ける。

だが真の狙いはこの斬り上げじゃない。

後ろに下がる時奴の重心は当然後ろにかかる。

不安定な体勢、一瞬だがこのチャンスを逃すほど俺は優しくない。

斬り上げた〈クウケン〉を俺はブーメランのように投げた。不安定な体勢の爺は、これを避けることができない。となればやることは一つ。

「待ってました、ガードぉ！」

「っ！」

大剣を使いガードする、瞬時に判断したお前の頭とそれを可能にした肉体は素晴らしいものだろう。

だが、ここで終わりだ。

大剣にぶつかり火花を散らすはずの〈クウケン〉はもうない。

「なにっ！」

もう遅い。〈クウケン〉は俺が創造魔法で作った武器。消そうと思えば一秒もかからない。同時に作ろうと思えばまた、一秒もかからないのさ。

爺の懐に入った俺は、もう一度作成した〈クウケン〉を一閃した。ゆっくりと倒れる爺を一瞥(いちべつ)し、勇者らしく一言。

「お墓があんたを待ってるぜ」

完全に決まった。フッ、これが勇者の力だ。まあ爺にしては良くやったと思う。

そうして俺は剣を一振り、爺の血を落と――――――

血が、血が付いてない？　まさか！

振り返るとそこに爺はおらず、同時に悟った。

その場で回転と同時に遠心力で威力の増した剣を振る。

剣と剣がぶつかり火花がまた散る。この死にぞこないの爺が。斬ったはずの腹には傷一つない。

「ははっ、どういうことだこりゃ」

「ガハハハハ！　簡単なことよ。ただちょいと硬くなっただけだ」

なるほど。服自体は裂けているようだが、血で滲(にじん)んだ様子が一切ない。硬化、ずいぶんと厄介な能力じゃねえか。

「面白れぇ、それならもうちょっと楽しませてもらおうか、糞爺(くそじじい)」

「望むところだ若造」

楽しい楽しい殺し合(手合わせ)いの再スタートだぜ。

第七話「生理的に嫌い」

ゼロ・ヌルノートは戦闘狂が嫌いだ。
別に戦い自体が嫌いというわけではない。むしろ喜んで相手の自信を叩き潰すタイプだといえる。
ではなぜ嫌うのか、そのわけを彼は過去、自身の部下ロイ・ワークスにこう説明している。

「実を言うと昔、とある漫画の中で戦闘狂のキャラがいたんだ。そいつの顔がやけに酷くてしかもいろんな液を出しながら戦うっていうキャラだったんだ。そいつを見てから一種のトラウマ？になってしまってな。狂ったやつを見るとつい斬りつけちゃうような癖ができたんだ」

一言でまとめると『生理的に嫌い』だそうだ。

◆◇◆◇◆

「「ぬおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」

大地が震えるような雄叫びとともに城の壁が吹き飛んだ。
といっても全壊というわけではない。アノン城二階、将軍の部屋の壁が吹き飛んだだけだ。
…いや、実際には大事（おおごと）だろう。
城の壁が吹き飛んだという事実だけでも大事件といえるようなことなのに、そこから二人の人影が飛び出たとなれば町はまだしも城内は大騒ぎだ。

人影の中の一人は将軍。このアノン王国最強の老兵にして生まれ

ながらの戦闘狂。普段は物腰柔らかな老人だが、ひとたび剣を握ればとどまることを知らない老人無双と化す。

もう一人はゼロ・ヌルノート。まだ知られてはないが異世界から召喚された勇者。そして又元の世界では、魔王として最強の力を振るっていた。残念ながらこの世界に来ても勇者パワー的なものは手に入らなかったが（もし手に入れていたらそれこそ恐ろしいが）、それでも魔王の力は健在だ。本気を出せば『ウルト〇マンくらい巨大化して無双』なんてこともできてしまうかもしれない。

つまり何が言いたいかといえば、最強と最強の戦いなんてものはろくな結果にならないということだ。

空中で斬り合う二人。

もちろん重力によって彼らの身体はどんどん地に近づいてゆくが、そんな現実を真っ向から無視しているのは尊敬に値すべきなのだろうか、それともバカと罵るべきなのか。

そのことは置いておくとして。肝心の二人はいまだ火花を散らしていた。

赤い刀身に黒いラインが刻まれた刀〈クウケン〉は、すさまじい速度で斬撃を繰り出している。

息もつかせぬ連続攻撃は、一般の兵では一秒も持たないだろう。

対する剣は全長２ｍ３０?、銀の刀身に黄色い鍔、装飾が一切なされてない無骨なデザインの巨大剣、〈小指落とす剣〉。その名の由来は、初代勇者【アルバート・レックス】の『レックス伝記』の一節から取られている。

ちなみにどのような内容かというと、

『勇者レックスが魔王のもとに向かう途中、魔王の配下の巨人が町

を襲っているのを発見した。
それを止めようと勇者は巨大剣を持ち巨人に立ち向かった。
激戦の末、巨人の弱点が小指だと悟った勇者は、その巨大剣で巨人の小指を切り落とした。
巨人は倒れ町は救われた』

このことから〈小指落とす剣（ドロペッドリトルフィンガーソード）〉という名が付けられたらしい。
将軍が持っている剣はそれの複製（レプリカ）だ。
といっても製造方法は全く同じなので、違いなどないのだが。
将軍はその巨大剣を盾にしゼロの斬撃を防いでいた。
一見防戦一方の戦いに見えるかもしれないが、どちらもこの状況から逃れられないのだ。
なぜ？と問われればこう答えるしかない。

空中だから。

そしてまた、先ほど言ったように二人は強者だ。だが人の子でもある。某野原家の長男のような放屁で飛ぶ能力は持ち合わせていない、かといって羽が生えているわけでもない。

「ふっ、どうする？　このまま落ちるか？」

剣を振るいながら笑うゼロ。
この余裕はどこから来るのだろうか、そう思った人は第一章第一話を読んでもらいたい。
この男はただの強者ではないのだ。
パラシュート無しのスカイダイビングの感想が『土埃が煙（けむ）い』なのだから、この程度の高さから落ちたところで何の問題もないのだ（もっとも高度５０００メートルから落ちて無傷で済む身体の方が問題なのだろうが）。

「ふん、若造の心配を軽々しく受け取るほど貧弱ではないわ！」
そう言い放ち巨大剣を振るう。
空中では身動きが取れない。当たり前の事なのだがその当たり前が回避ができないという状況を作る。
よってゼロができることはただ一つ。
回避中心のゼロとしてはやりたくない、防御。
そして細身の〈クウケン〉が衝撃を簡単に受け止めることは難しい。
「チッ！」
大きく弾き飛ばされ大地に叩きつけられるゼロ。
しかしゼロが大地に落ちる高さにいるということは、将軍もあと少しで落ちるということを意味する。
「ぬおぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」
高く舞う砂埃、大きく凹む大地。生身の人間だったら少なくとも大怪我、打ち所が悪ければ即死というのもあり得る状況なのだが、砂埃から現れた将軍は無傷であった。
「この高さから落ちて無傷とは。まったく…バケモンだなてめぇは」
「そっくりそのままお主にお返ししよう」
将軍に弾き飛ばされ地面にたたきつけられたゼロであったが、その体には多少の砂はついている者の傷一つなかった。
「で、あんたのその体はどうなってんだ？　もしかして改造人間？」

「残念ながらそのようなものではない。儂の能力、『鋼の身体(メタルボディ)』の効果じゃよ」

◆◇◆◇◆

『能力』。それは一部の人間が持っている魔法以外の力。

魔力を消費し使用する『魔法』とは違い、何も消費するものがない。そういえば便利なものと思えるかもしれない。

だが何事にも多少のデメリットというのは存在する。

魔法使いには基本、得意魔法と不得意魔法というものがある。例えば炎の魔法はうまく使えるが水の魔法はうまく使えない、という感じだ。

しかしそれはあくまで得意と不得意であって、水の魔法が使えないというわけではない。

つまり『魔法』はメリットとして『使える用途が広い』が、デメリットとして『魔力を消費し空になると使用できなくなる』。

『能力』はメリットとして『魔力などのエネルギーを消費しない』が、デメリットとして『一種類しか覚えられないので用途が狭い、しかも覚えられる人は一握りだけ』。

つまりどちらが上かというのはそれぞれによって意見が分かれるのだ。

◆◇◆◇◆

「『鋼の身体(メタルボディ)』…。なんか中二病的な名前だな」

「作者のネーミングセンスがなかったのじゃろう」

作者のネーミングセンスの事は置いといて、お互いに剣をしまい中二病的な会話に移る。

「『鋼の身体（メタルボディ）』、全ての物理衝撃を消滅させるこの能力は非常にシンプルじゃ。斬撃や打撃の威力はほとんどこいつが消してくれる。たまに消しきれんほどの威力もあるが、そんなものにはめったにお目にかからん」

「消しきれんほどの威力もある」のところでゼロの眉がわずかにピクリと動いた。しかしそれには気づかず将軍は喋り続ける。

「弱点があるとすれば…やはり魔法に弱いということむおおおぉぉぉぉぉ！！」

将軍が喋り続ける中、ゼロは動いた。〈ジャックナイフ（切り裂きジャック）〉を取出しダーツのように投げつける。間一髪で将軍は巨大剣で防いだが、そこがゼロの狙いだった。

第七話「生理的に嫌い」（後書き）

なんか中途半端な終わり方でスイマセン

第八話「右手は握手、左手はナイフ」

（やはり意識しないと能力は使えんらしいな）

ゼロが狙ったのは二つ。

一つは疑問の解明。

先の説明である程度は『鋼の身体（メタルボディ）』のことが分かったが、語るのに集中している今がチャンスと見たゼロは行動に移った。

もちろんこのまま聞き続けるという方法もあったのだが、時間の無駄だと判断したのだ。

そもそも彼は、先の分かっている話を長々と聞いてあげるほど心優しい人間ではない。どちらかといえば「右手は握手、左手はナイフ」のほうがあっている。

しかし、ここで一つ問題がある。

この能力が無意識に発動しているのか、それとも意識して発動しているのか。

もし意識してやるならば不意打ちが十分効くだろう。不意打ちは『大鳥』の力を吸収する前からやっていた得意技だ。成功する自信はある。

しかし無意識にやっていたとなると話が違う。お得意の不意打ちが使えないというのは気分的にすぐれない。

実を言えば、彼は不意打ちが大好きなのだ。

まあ実際はそれよりも大好きな趣味があるのだが、その話はまた今度にしよう。

そしてもう一つの狙い、隙を作ること。

大剣はその大きさゆえに、広い攻撃範囲に強力な斬撃を叩き込める。だが前回も言った通り何事もメリットばかりではない。大剣はその名の通り一般の剣より大きく、重い。大きければ大きいほど斬

れる範囲は広くなるが同時に持ち運びに支障が出る。重ければ重いほど斬撃の威力は増すが剣自体を振るのがきつくなる。

そうなると、どうしても続けざまに剣を振るというのは不可能になってしまう。

肉体強化の魔法や能力が無いのにもかかわらず、大剣を振り回し続けるなんてことをすれば、最終的には肉体の崩壊が待っている。

将軍は確かに他の兵と比べれば、能力抜きでも人外ともいえるスタミナと腕力を持っているだろう。ただそんな人外でも身体は人間だ。無理なことをしようとすればおのずと体が悲鳴を上げる。

そのことをわかっているからこそ、将軍はむやみに巨大剣を振らない。ゼロのいきなりの不意打ちにも老兵の勘で防ぐことができた。

そう、この老兵の勘こそゼロの勝利ターゲットだった。

将軍は確かに初撃を防いだ。しかし、巨大剣で防いだのだ。

前述のとおり大剣はその大きさ、重さが欠点となり素早さに欠けてしまう。ナイフを防いだ巨大剣は、その巨大な刀身で将軍の視界を妨げてしまう。

そして一瞬の判断のため、実際のナイフの衝撃を防ぐ以上の力でガードしてしまった。例えるならば、イチゴを手のひらに乗せそれを鉄球を握りつぶすような力で握る（良い子はマネしちゃダメだぞ☆）。当然イチゴは潰れるが勢い余って手に爪が食い込んでしまうだろう。

例えが分かりにくいのは放っておいて。つまり何が言いたいのか。必要以上に力みすぎている、ということだ。

お分かりいただいただろうか。

いま将軍は〈ジャック（切り裂きジャック）ナイフ〉を弾いたはいいものの迫ってくるゼロに気づいていない。そう、全てゼロの読み通りということだ。

ゼロの勝利は確定かに見えた。しかしそこでもまた老兵の勘が冴えわたる。

「そこかぁ！」

巨大剣を迫る気配ごと斬り上げる。予想だにもしなかった一撃に、さすがのゼロも真っ二つ――――――にはならなかった。

もともとそこには誰もいなかったから。

「なぬぅ！？」

しかし時はすでに遅し。将軍の剣が振りあげられるころにはすでに後ろは取られていた。

「楽しかったよ…爺（じじい）」

一閃される〈クウケン〉。飛び散る赤い液体。

「さ、さすがじゃ…勇者よ」

こうして倒れる将軍。今、打ち合い（殺し合い）は終わったのであった。

「…だが儂を倒してもいずれ第二第三の将軍が」

「お前はどこぞの魔王か」

げしっ！　と明らかに怪我人にするべきではない蹴りが放たれる。

「ぐはっ！」

案の定完全に気を失う将軍。どうやら彼は三途の川に猛スピードで近付いているようだ。

「ん？　なんだ、お前たちも俺と遊びたいのか？」

騒ぎを聞きつけた兵士たちは、勇者様のありがたいお言葉を聞き、感動のあまり泣きながら帰っていったようだ。

そんな中、一人の少女が走ってきた。

「ゆ、勇者様！　お怪我はございませひゃああ！？」

血まみれの将軍を見た瞬間飛び上がるリリア。まあこれが当たり前の反応なのだが。

「だ、大丈夫ですか！　将軍様！　すぐに回復班を……勇者様？」

慌てるリリアをよそにゼロは〈羽根〉を作る。

「きれいな羽根…じゃなくて！　何ですか？　それは？」

慌てたりぼうっとしたり？を浮かべたりと、表情の変化が多い彼女にゼロは一言。

「俺の身体の一部」

「へ？」

リリアが興味深そうに凝視する中、ゼロは羽根の根本を将軍の背中の傷口に射した。今回の羽根は注射型。内蔵された回復液が肉体の再生を促進させる。

「っ！　くはぁ！」

目を大きく開き飛び上がる将軍。びくっとするリリア。〈クウケン〉を消し、〈ジャックナイフ（切り裂きジャック）〉を腰に戻すゼロ。

「爺にしてはなかなかのもんだった。お前は生かして損はない人材だ」

そういって将軍に手を差し出す。

「お前も魔王って野郎に会ってみないか？　結構面白そうだぜ」

目の前の男の言葉に呆然とする老兵。そして、相変わらずの爆音が響く。

「がはははははは！！　やはり儂が見込んだ通りじゃわい。その言葉、確かに響いたわい！」

「…相変わらず声がでけぇな、この爺」

「耳がジンジンします」

呆れる二人をほったらかし、その老兵は笑い続けた。

いつまでも、いつまでも…。

「マジで殺すか…」
「や、やめてください勇者様！」

◆◇◆◇◆

将軍が勇者に負けた。この知らせは瞬く間に城中に広まった。
そのため勇者の噂が今城中に飛び交っている。身長が三メートルを超す巨人だの尻尾が生えているだのロッ〇マンだのと妄想めいた噂が飛び交う中（最後のは嘘）、当の本人は客室で木の椅子に足を組み座っていた。

「（さて、これからどうしたものか）」

今ゼロの目の前にはリリアに頼んで持ってきてもらった本が山積みにされている。一冊１５００ページの辞書並みの本の表紙には金色の字で『レックス伝記』と書かれている。
ゼロは情報は力よりも高価だと思っている。どんなに腕力を持っていたとしても、無知では最善の動きができない。個人だろうが団体だろうが情報の大切さに変わりはない。もっともその情報をもとにうまく行動できる策士がいなければ宝の持ち腐れだが。
『レックス伝記』に書かれていたのは、勇者の輝かしい活躍。どこからどこまでが真実かはわからないが今更確かめようもない。役に立ちそうなものだけは頭に入れたが、どれもそれほど役に立つとは思えない。

だが、一つこれを読んでわかったことがある。
勇者が派手で無茶苦茶なやつだということだ。

なんでも勇者はたった4人の仲間とともに何千万もの魔物の潜む魔王の城に突っ込み魔王を打ち取った、らしい。勇者が強すぎなのか魔王が弱すぎなのかはわからんが、とてつもなく非常識だということは分かった。

実を言えばこんなバカげたことがゼロに可能か不可能かと問われれば、可能なのだ。本気を出せば城一つを丸ごと消滅させることだってできるし、戦場のど真ん中で無双だってできる。
だが彼はそれを良しとはしない。
前の世界では魔王とも呼ばれていたが、別に彼自身が酷く冷酷なわけではない。ただ殺すべき相手が多かった、それだけなのだ。
何より彼は無双というのを好まない。一方的な暴力というものを彼自身父の影響でひどく嫌っているということもある。
もちろん彼は完全に善人というわけではない。力も必要とあらば思う存分振るうし、殺しだってする。だがどうしても心の奥底で無双への反発があるのだ。

話を戻そう。

やはり過去の勇者にも暗殺者（アサシン）が送り込まれていたらしい。それを勇者は華麗に打倒したと書かれているが、今の勇者にも来る可能性は高い。
暗殺者（アサシン）に後れを取ることは無いだろうが俺の周りにいるやつら、特にリリア（リリア）は危険だ。どう見ても対処できそうにない。
だが巫女（リリア）に消えてもらっては困る。巫女の死は必然的に勇者召喚という事実の隠ぺいに繋がるだろう。ゼロ自身実際に前の世界でも

そのようなことを見ていた。

「（まったく、金と権力は恐ろしいな）」

はぁ…、とため息をつきながら貴族が使うようなフカフカベッドに仰向けで倒れる。

「（派手に動かれる前に動くか…）はぁ…」

ため息をつきながらもこれからの展開に期待を寄せ、策を練り始める勇者であった。

第九話「あああああ」（前書き）

遅れてスイマセン……でも見捨てないで！

第九話「あああああ」

「チッ、ゴミが……」

心底つまらなそうな舌打ち。

その声を自分は聞いたことはある。が、その先の人物が思い出せない。

声の主を確かめるべく、そのままゆっくりと目を開ける。ノイズの混じった視界で見えたのは、二人の男。

一人は壁に寄り掛かるように倒れている中肉中背の男。

だが、殴られ続けパンパンに膨れた顔と異様に凹んだ左胸が、彼がすでに無事ではないことを物語っている。貴族特有の無駄に金の装飾が付いた煌びやかな服だったものは、所々破け血が滲み、無残な姿を晒している。腫れた瞼(まぶた)に隠れる眼にはすでに生気など無く、無情な暴力を受けたことを訴える充血した白目の赤と生前の絶望を映した濁った瞳の青が、どちらもこの男の死を語っている。

その死体を見下ろす男…いや、もっと若い。見た目は15，6歳位だろうか…。

おそらくこの少年が貴族らしき男を殺したのだろう。彼が来ている灰色の古ぼけたローブや、その白い肌にはべったりと血がこびりついている。もちろん少年自身の血ではない。見たところ普通に立っているし、おかしいところは何もない……この惨状を除けばだが。

動かない頭にムチ打って、現状を把握していると血だらけの少年が自分の方に歩いてきた。

「あああ、あああああああああ。あああああああああああ」

耳にはあああとしか聞こえない、だがその意味が分かる。そしてこの少年が誰なのかも。
一方的な暴力で弱者を痛めつけ、自らが持つ化物のような力が圧倒的だと自分自身に言い聞かせている愚かな餓鬼、ゼロ・ヌルノート。弱くて小さい過去の自分。

◆◇◆◇◆

目が覚めると、全身に滝のような汗をかいていた。
久しぶりに見た夢は相変わらずグロテスクで、まったく面白味のないものだった。まあ、面白味のある夢など見たことは無いが。
そんなどうでもいいようなことを考えながら、適当な身支度をする。
身支度といっても昨日渡された少ない金貨と、兵士から掠め取った灰色のローブを身にまとう。ただそれだけ。

扉の前の兵士に軽く会釈し、しばらく歩くと城から出れた。
城門の兵士に「散歩」とだけ言うと、寝ぼけているのか、すぐ通してくれた。
ずいぶんガードの弱い城だな、と適当な印象を持ったが早くも撤回された。
（追跡者（ストーカー）か。さすがにそこまで甘くはないか）

朝早くから騒がしい城下町で、普通に紛れているプロがいるようだ。
素人だったら気が付かなかったが、相手が悪かった。
ゼロは部下を持つ前から、たった一人で幾多の危険を潜り抜けたプロの中のプロだ。
見た目１６，７歳の少年だが、中身は４０代後半。経験が違う。

追跡者を見極める目は持っている。
怪鳥を吸収したためか、視力は望遠レンズ並みに優れている。
その眼で隠しきれない小さな動きをとらえる。
歩き方や持ち物、一般の目に紛れ込んだ異様な目、些細な物事でもじっくりと見ればわかる。

結果3人のプロを見つけた。
だがこちらからは手を出さない。
今回の目的は情報収取、無益な争いは避けるべきだ（無論王国の勇者へのイメージを下げないためというのもあるが）。
小道に入ると同時にフードを深くかぶる。さあ、兵士の質を見極めさせてもらうぞ。

◆◇◆◇◆

勇者ゼロが小道に入ると同時に、指示が来る。

「ナサカ、追え。リトは時間差で。ヌイは次の指示が来るまで待機」

白の簡素な布の服、滅多に着ない一般の服を身にまとった俺は、この前召喚されたという勇者ゼロを追っていた。
だが正直なところ、奴が勇者ということに半信半疑になっている自分がいる。
こちらに気付いた様子もなく、ただぶらぶらと歩くだけ。
どう見てもただの散歩にしか見えない。
将軍との手合わせに勝ったとの報告を受けているが俄かに信じがたい。
やっぱり見張りの兵が言ってたとおり、ただの散歩ではないかと疑問に思ってしまうのだが、これは任務だと頭を切り替えて追跡を

再開する。
隠れながら小道を進んでいく。
右に左に右に右に左に直進、右に右に左と、少し目が回ってきた。
そしてついに元の道に戻った、と思いきや勇者を見失ってしまった。
近くにいた若い男女や腕っ節の強そうな漁師、眼帯の老人に聞いてみたがいい答えは得られなかった。
仕方なくリトとヌイとともに捜索を開始する。

（あの少年が我々を撒いた？　そんな馬鹿な話があるはずがない）

そんな疑問を抱きつつも、俺は勇者を探し続けた。
一人の軍人として、負けるわけにはいかなかったのだ。
結局勇者捜索は、すでに勇者は城に戻ってきている、という上官のありがたいお叱りで幕を閉じた。
昼飯を城で食べた後、巫女リリアと共に城下町を回っていく彼らは、普通の恋人同士にしか見えなかった。
所々で顔を赤くする巫女リリアを見ていると、明らかに勇者に好意を持っているということがわかる。
幼き頃から男児との接触が少ない巫女にとって、勇者というのは憧れの対象なのかもしれない。
対する勇者ゼロは、リリアに引っ張られる形ながらも頻りに周りを注意深く見ていたような……気のせいか。
また、感情の波が随分と緩やかだということが分かった。
しかし、将軍との戦いでは殺意丸出しと聞いている。
戦闘狂か何かの類だろうか。だとしても要注意人物だということに変わりない。
たとえ将軍との戦いが本当だとしてもだ。

しかしその後も異常はなく、その日は何事もなく終わった。勇者

のお披露目が7日後と決まり、それで終わりのはずだった。

翌日、一人の貴族が逮捕されたという知らせが無ければ。

第九話「あああああ」（後書き）

次も早めに投降…じゃなかった、投稿したいです

第十話「青髭きめぇ」

「そうか……止めてすまなかったな。それじゃ」

そういうと、男は筋肉隆々の漁師らしき男に声を掛けに行った。

（さすがに解らないか、この姿では）

そう心の中で呟くと、老人はゆっくりと歩を進める。

薄汚れた灰色のコートに身を包んだその老人は、異質な姿をしながらも周りの人間と同じほどの気配しか感じられない。

コートの中からはみ出した色素の抜けたような白髪、皺だらけの顔に全くといっていいほど似合わない輝くルビーのような瞳。そして極め付きは左目を隠す飾りっ気のない黒の眼帯。

注視すれば誰でも違和感を感じるはずのこの顔も、目立つ目立たないではなくこれが当たり前と誰もが信じてしまう。

先の男、ナカサは軍人だ。

確かに諜報や追跡は彼の専門ではないが、人の機微や異変の察知に彼は長けている。

そんな彼を見事にだましたこの老人は、相当な手慣れだということがわかる。

しかし、正確には老人という表現は正確ではない。

この男こそ、流星のごとく現れ邪悪な魔王を打倒すという、勇者ゼロ本人であった。

◆◇◆◇◆

巨大な怪鳥を吸収してから、ゼロは人の限界をはるかに超えた力を手に入れた。

『肉体および魔力を特殊な羽根に変える』、一見それほど強力なものとは思えないが、汎用性に優れなおかつ戦闘にも大いに使える優秀な能力なのだ。
そして今回使われたのもこの能力のうちの一つ、『肉体の羽根化』だ。
戦闘時には回避としても使われる羽根化だが、逆に言えばいったんこの状態になってしまえば、元に戻るときどのような姿にでもなれるということだ（余分な肉体は魔力としてストックすることができる）。
人型の場合、女顔になったり全くの別人になるなど元の顔の造形を大きく変えてしまうと、本来の自分の顔が分からなくなってしまうため、肉体年齢の幼児化もしくは老化しかできない。
獣になることも可能と言えば可能だが、元の色（髪の黒や赤、傷）などの面影が多少残ってしまう。
と、以上のように完璧な変身ができるというわけではないが、今回のような老化を用いれば微弱な気配消失の魔法と組み合わせるだけで、追っ手を撒くのに苦労しないことは確かだ。

◆◇◆◇◆

（どうやらどの世界でも、愚痴というのは本心を表すらしいな）
彼もとい老人ゼロは、戦いに疲労した戦士たちの休息所・酒場にいた。
目的はもちろん情報収取のためだが、なぜここなのかというとそれは前の世界での経験が元での行動だ。
彼がいた世界とこちらの世界には、どちらも時代が西洋風という共通点がある。
というより電気が通りながらも魔法が蔓延していた前の世界と比べると、まるで過去にでも来たような気分だ。

もっとも田舎生まれのゼロとしては電化製品などに興味もなく、触れたことも数えるほどしかないので特に問題などないのだが。

話が脱線してしまったようだ、本題に戻ろう。

簡素な木の椅子の背もたれにもたれながら耳を澄ましていると、幾多の声が聞こえてくる。

将軍に負けず劣らずの馬鹿笑いから隅でこそこそと話す小声、酒に溺れたものの寝言や喧嘩寸前の言い合いなど様々な声が耳に入ってくる。

その中でもゼロが一番に注目するもの、それが愚痴だ。

不満や鬱憤を酒の勢いに乗せてべらべらと吐いていく、その中に紛れ込んだ些細な個人情報をひとつ残らず掴み取る。

当然その中には個人の偏見などによって、曲げられたものもあるかもしれない。そこら辺の曖昧なものは当人に『お話し』してもらうしかない。

「あのトカゲ野郎、調子に乗りやがって」

ぶつぶつと愚痴を呟く男。鉄の鎧と腰に下げた剣に盾、それらに刻まれた紋章から見るにどこかの貴族の私兵のようだ。

青髭で覆われた口、若干臭ってそうなぼさぼさの黒髪、身長は１８０台、年齢は３０後半ほどだろうか。

隣にいるのはまだ若い、２０前半位の同装備の兵士。おっさんの後輩のようだ。

「デンセンさんやばいですって。あの人ほんと地獄耳なんだから」

「はん！　あんなヒョロヒョロした奴に聞こえてどうなる？　俺を殺れるもんならやってみやがれってんだぁ！」

宥める後輩、叫ぶおっさん。

「うるせぇぞ馬鹿野郎ぅ！」と誰かが叫んだが、おっさんには聞こえてないようだ。

「それに仕方ないですって。ゲルド様はそういうお方なんですから」
（ゲルド……どこかで聞いたような。）
「あの成金野郎をこの国の貴族だなんて認めねぇ！　どうせあのゾンビ姫にこっちの情報流してるにきまってる」
「ちょマジでやばいですって！　解雇どころじゃすまなくなりますよ！」

二人が騒いでいる中で、ゼロは成金トカゲ野郎（仮名）について考えていた。
【ゲルド・ヴェルスチュンヅング】、謁見の間で自分を舐めまわすように見ていた細身で長身の男。
ここに来る途中にも悪い噂を聞いた。女・金・権力とスキャンダルの宝庫だということは知っている。
しかしまだわからないことがある。ゾンビ姫、敵国（グレイブ）関連の事なのだろうか。
そこで思考をやめ、また二人の話に耳を傾ける。

「うるせえ（うるしぇぇ）！　俺を『青髭きめぇ』なんて理由でこうきゃく（降格）させや（させや）がって（ぎゃって）」
「そ、それは……何とも言えないですけど。で、でもまだクビにはなったわけじゃないんですから、昇進してゲルド様を見返してやりましょうよ」

酔いが回ってきたのだろう、おっさんは次第にろれつが回ってこなくなっている。
若者は酔いつぶれ寸前のおっさんに肩を貸し、酒場から出て行った。

（少し話を聞かせてもらうとしよう）

ゆっくりと席を立ったゼロは、偽りの弱さを身にまとい彼らに近づく。

その足取りはまさに老人そのものだが、獲物を見つけた鷹のような目は、その姿と実に不似合だった。

第十話「青髭きめぇ」（後書き）

遅れてスイマセン、一週間以内に投稿してくれたらうれしいとか感想もらったのに……次は頑張る！
それとお気に入り登録が６００越え、何それ怖い。

第十一話「零時・？」（前書き）

お気に入り件数６００越えに調子に乗った僕は、ストックとして貯めるなどという考えを捨て即投稿へと向かうのであった！

第十一話「零時・?」

どのような世界であろうと欲深き人間というのは存在する。
金、地位、力、権力、女。面白いところだと不老不死なんてものもあるかもしれない。
勿論欲は誰にでもあるものだ。
よっぽど危険なものでなければ、他人がそれをとやかく言うのは筋違いだろう。

金が欲しければ事業を立ち上げる手もよし、地道に働き貯金するのもよし。
単純な力が欲しいなら鍛えればいい。
女が欲しければその女が求める男性になる、女を惚れさせる男になる、どちらも素晴らしいことだろう。

上記に挙げたように『まともなやり方』ならば文句は無い。
ではなぜこの話題を上げたかと言えば、そのやり方にある。
同じ類で言えば、『まともではないやり方』だ。

【ゲルド・ヴェルスチュンヅング】伯爵。
生まれは商人だが、巧みな話術と手に入れたいものへの執着心の強さが彼をこの地位まで上らせた。伯爵の地位も金で買ったものだ。
また、彼のものは非常に女に目が無いらしく、奴隷商人と数多く接触があることでも裏では有名らしい。
まあ実際のところ大きな証拠も掴めず金によって皆、この件から手を引いてしまっているのだが。
しかしゼロが目を付けたのはそこではない。
謁見の間で王を待っているとき、向けられたのは興味や疑いの目ばかりではなかった。

将軍の戦ってみたいという傍迷惑な目に注意を少しばかり取られていたが、たった一つ、爬虫類のような獰猛な目が自分に向けられていることをゼロは感じ取っていた。

◆◇◆◇◆

酒場を出たおっさんたちを『ゲルド伯爵の使い』と偽って裏道に呼び出したゼロは、二人を気絶させ羽根を使って記憶を複製、彼らから見た視点での伯爵の情報を全て得た。

その後城に戻りリリアと城下町を回った。

はしゃぐ巫女に適当に返事をしながら意識を集中させる。

先のおっさんたちの服に紛れ込ませた便箋。

真っ赤な蜜蝋で閉じられた黒いそれは、これまた赤で『ゲルド伯爵へ』と書かれている。

彼らは便箋を届けるため（無論仕事先だということもあるが）、伯爵の邸に行くだろう。

邸に着いた時、便箋は消え代わりに蚊が飛び出す。

何十匹も出てきた蚊にはさすがに驚くだろうが、飛ぶものを打ち落とすのは楽なことではない。さすがに全ては落とせないだろう。

飛び立ったかはその豪勢な屋敷のいたるところを飛び回り、主人にその情報を送る。

送られた情報の整理で自らの現状を見れず転びそうになることもあったが、無事屋敷の全てを把握した。

そして同時に面白いものを見つけた。

ゲルドの私室、その煌びやかな金の机の上に置かれた小さな紙。

そこには

『零時・？』

と書かれていた。
前者は時間の指定、後者はコードネームだろうか。
まあどちらにせよ、ゲルド（トカゲ）とスパイ（ネズミ）が会うということが分かったことはゼロにとっては思わぬ収穫だった。
夜襲をする価値があるこの機会、チャンスかそれとも罠か。
行くか行かぬか、彼にとってはわかりきった問だった。

◆◇◆◇◆

町が寝静まる深夜。城でも兵士による巡回が始まり、警戒が強まっている。
夜というのは裏の者の動きが活発になりやすい。
それは城も例外ではなく、暗殺や盗人には細心の注意をしなければならない。
街中や城内では、浮（ふ）ライトがいくつも漂っている。
浮ライトというのは、野球ボールほどの大きさの光を発する球体だ。光魔法が掛けられており、「ライト」の言葉で光りはじめる。
おもに夜の灯りとして使われ、この世界の人間には生活必需品となっている。
前の世界の電気のようなものなのだろう。

話が変わるが、城で生活するのは王や従者だけではない。
上流貴族や他国の客人も一時的に住むことがある。
もちろん全員ではない。
疚しいことがある貴族（全ての貴族が疚しいということは無いが）や他国の客人は警戒し、町の宿を借りることもある。
だが今回のターゲット、ゲルド伯爵は城下（ここ）町に別居を持ち、そこで眠っているらしい。

（この邸の設計を本当に伯爵（ヤツ）が考えたのだとしたら、かなりできるな）

そう心の中でつぶやくゼロの格好は、まるで忍者だった。
全身を覆う漆黒のスーツは、体にぴったりと張り付いている。
その上から肘までの上着と膝までのズボンを、顔全体を覆う目だけ出したマスクを着けている。
しかしこの服、魔力では形成されてはいない。彼がその手で手に入れたものだ。

そう、皆さんは覚えているだろうか。彼が異世界に来て初めて出会った暗殺者もとい鼻水たちを。
彼らから奪った忍者スーツを今ゼロは着用している。
確かに足音を消すという永続魔法もいいが、これの本質はそこではない。
この忍者スーツは全５５種類の色を記憶しており、魔力を流すことによって色が変えられる。
ゆえに少しでも魔力が無ければただの色違いハッ〇リ君と化してしまうのだが、逆に条件さえ整っていれば隠密行動に特化した迷彩服となる。
そして呟きに出た警戒、それは警備の厳重さと豪邸の作りにあった。
門に５人予備１０人、廊下の巡回に１０人予備３０人とかなり厳重で、兵士たちの装備も魔法で強化したものとなっている。
話を聞かれたくないためだろうか、自室の前には兵を立たせていない。

確かにこの人数は厳しい。
だが本当の問題は兵などではなく、廊下にあった。
曲がり角の少ない一直線、その左右に扉があり一つ一つの部屋が

あるのだが、この構造を屋敷全体に取り入れているのだ。
それがどうしたと思ってしまうかもしれないが、曲がり角での奇襲ができず、なにより隠れる場所がないのだ。
執着心が強いゲルド伯爵だが、置物は小さいものを好む。というより何かと小さいものが好きなようだ。
お子様用のナイフフォークを愛用し、指輪やネックレスも自分には到底身に着けられないものを好む。
……それと女も。

（あんな強面でロリコンとかありえ……なくもないのか？）

そんな考察はどうでもいいとして、彼は廊下を進んでいく。
黒色の忍者スーツは足音を小さくするが、勢いよく走ればもちろん音がする。
静かに落ち着いて歩かなければならない。
静かに……

静かすぎる、その異変に気づいたゼロは僅かだが歩を早めた。
いくら夜だからと言って、この屋敷には兵士だけで４０人、使用人や伯爵を合わせば６０人はいるはずだ。巡回兵に一度も会わないというのもおかしい。

（何かがあったか、それとも罠か）

どちらにしても危険なことに変わりはないが、ここまで来て引き返すわけにはいかない。
そのまま沈黙した廊下を歩き続け、伯爵の私室までたどり着いた。

（現時刻は０時、もし情報が正しければ？もいるはずだ）

王になってからこういう陰の仕事は無く、今回の潜入も久しぶりだった。
鼓動は早くなるが、頭は実に冷静だ。
適度な緊張感を保ちつつ、ドアノブに手を掛ける。
（待ち伏せだろうがなんだろうが、相手になってやる！）
ドアノブを引き僅かに開いた隙間から体を滑り込ませる。
身を低くしながらドアを閉め、辺りを見渡す。
宙に漂っているフライトには明かりがついておらず、カーテンも絞められていない。
待ち伏せの様子はなく、人気もない。
「……ライト」
ゼロの言葉に反応し、浮ライトの光が部屋を満たす。
そこには、

首を吊ったゲルド伯爵がいた。
足音も気にせず伯爵に近づく。
青白い顔にはすでに生気は無く、手首から感じられるはずの脈（血流）の温かさは微塵も残っていなかった。
昼に？からの手紙が置かれていた机には＞遺書＜と書かれた紙が、亡き伯爵の上には縄が括り付けられた浮ライトが、下には椅子が置かれていた。
（まさか……どうなっている！？）

何もかもが予想外だ。
兵士も、？も、伯爵自身の命さえも無くなっているとは。
（まだ、何かあるはずだ！　俺が気づいていない何かが……）
鷹の目を使い、隅から隅までこの部屋を見る。
どんな動きでも必ず跡が残る。隠し切れない跡が、必ず。
棚に飾られた宝石類に手は付けられていない。
ガラスには自分が薄く映っている他、目立った傷もない。
遺書の置かれたテーブルには私物らしき本や蛍光灯版の浮ライトが……
（紙……？からの紙がない）
そしてもう一つの違和感、鏡に映った自分はあまりにも小さすぎる。
まるで遠くから自分と全く同じ服装の何者かが、こちらを見ているかのように。

第十二話「血濡れた金」（前書き）

ご都合主義が少々アリなのでご注意を……

第十二話「血濡れた金」

「極東の島国では、我が国のように大量生産を始めとした高度な科学技術が無いと聞いています。ですので、大型の窓ガラスやペッドボトルなどは魔道具より高値らしいですよ」

なんていうことをロイから聞いたことがある。

この世界でもそれが当てはまるのだとしたら、この家は大損害と言えるのだろうか。

決して薄くはない窓ガラスを突き破ったゼロは、隣の家の天井に降りた。

『パリィン』では済まないような大騒音ではあるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

ゼロが飛んだと同時に?も逃走を始めている。

今逃がせば、次に会える確証はない。

(肉体強化を掛けても追いつけないか……鼻水どもとは大違いだ)

前の雑魚忍者たちとの距離を一瞬で詰めた肉体強化も、同レベルの高速移動術を使われれば追いつくことはできない。

そのあたりはお互いの魔力の限界がものを言うが、今回はいつもと条件が違う。

ここはゼロが前いた世界ではない、異世界なのだ。

城下町付近の地形は昨日の散歩で把握しているが、そこから先はわからない。

自殺を偽装するほどの奴だ、逃走ルートも用意しているに違いない。

一度こちらが迷ってしまったら、伯爵の死も自殺という偽りで締めくくられる。
見知らぬトカゲ男の命になど興味はないが、この死にどんな闇が隠れているのか、それをゼロは知りたいと望んでいるのだ。

一言でまとめれば、ここで逃がすわけにはいかないのだ。

「大いなる神鳥よ（グロウバァ ゴットヴォゲル）、わが身に宿りて（イズ メイネム）風となれ（ウィンド）」

詠唱は魔法のイメージを確固なものとする。
この魔法が示すイメージは、≪上位≫≪神≫≪自身≫≪風≫といったところか。
普段は無詠唱でできるはずだが、しっかり唱えているところを見ると冷静さを少々欠いているのがわかる。

詠唱が終わったた途端、ゼロの肉体は変化する。
肉体は一枚一枚の羽根となり、元のゼロの原型とはかけ離れた羽根の集まりとなる。
密着せず、それぞれが動くさまはイワシの群れを想像させる。
しかしその速さは尋常ではなく、まるで風のごとき速さで？を追い抜き、前に躍り出る。
肉体強化でだせる速度をさらに超えたこの羽根化は、肉体ではその速度に耐え切れない。
だからこそ、実体があるようでない魔法の羽根に全身を変えることで、速さの不可能を可能にしているのだ。
欠点と言えば、衣服を引っ掛けながら飛び、そして解除後衣服を自分が来ているように微調整しなければならないところ、だろうか。

「……っ！！」

？はこれにかなり驚いたらしく、硬直しているようだ。
その前に降り立ったゼロは忍者スーツのズレを治し、向き合う。
「一つ、質問してやる。……お前が？ってやつか？」
クウケンを取り出し、不意打ちに注意を傾ける。
ここから相手がどう出るかはわからない。だが、質問におとなしく答えようが襲ってこようが、結果は同じということは分かっている。
「……ふん、そうだ。私が？だ」
？、この国の裏で暗躍している存在、伯爵を殺し自殺に見せかけようとした真犯人、それが今目の前にいる。
（さて、記憶や情報は羽根で取ればいい。今すべきことはただ一つ……）
本人かどうかの確認、それだけで十分だった。
？もこれ以上喋る気はないらしく、懐から両刃のナイフを取り出している。
互いの殺気がぶつかり合う異様な沈黙は、すぐさま破られた。
破壊をまき散らす、両者の力の激突で。
「風浪弾（ふうろうだん）・極（ごく）！！」
「ギシンクロウ！！」
？の手から放たれるのは魔力を帯びた風。
周りの空気・魔力を内に入れながら進み、敵の攻撃ごと吹き飛ば

す風の魔法。
それを打ち破らんとするゼロが使用したのは無詠唱の創造魔法。
生みだしたのは……爪。

◆◇◆◇◆

左手に着けられた黒色のそれは、言うならばグローブ型の装備といったところか。
手の甲にはめ込まれているのは、丸みを帯びたエメラルド。そこから紅のラインが血管のように伸びており、その先の銀で包まれた爪に繋がっている。
裏の掌には緑のラインで刻まれた魔法陣があり、この装備がただの接近戦用ではないということがわかる。

これが三つ目の装備、『ギシンクロウ』。
鷹のように鋭く、獲物の肉を引き裂く神の爪。

◆◇◆◇◆

左腕を後ろに回すと同時に、第二の爪が解放される。
まるで、銀の爪の上から生えたかのように現れた紅の刃。短くはないそれを大きく振りかぶり、一気に振り下ろした。
巨大な風の塊に振り下ろされた刃は、暴風とつばぜり合いをし、切り裂いた。
普通ならば大技を使い怯んだ相手に、こちらも一撃を叩き込みたいところだが、？もただの雑魚ではない。
先の魔法に身を隠し、爪を振り下ろしたばかりのゼロに突っ込んできた。

（やけにでかいくせに威力が低いと思ったら囮かよ）

そう愚痴っても薄情なことに、時は待ってくれない。
？の一撃が来る。
「風雅断（ふうがだん）Z…！！」

しかし、その剣は空を切ることになった。
なぜなら吹き飛んだのは、飛びかかってきた？だったのだから。
空に浮かび上がるゼロ、その背から生えるのは紅の翼。
びっしりと敷き詰められた羽根は、一枚一枚がジャックナイフの切れ味を有している。しかし、刃物どうしがぶつかり合うガチャガチャという音はせず、一糸乱れず並ぶ姿は、一つの芸術品のような美しさを醸し出している。

「こういう時なんていうんだっけ……さすが汚いな忍者？」
「チッ、死ね」

こちらに飛びかかると同時に、右・左フックをかましてくる。しかし、翼の出現は反則的過ぎたようだ。
？の怒涛の連打を躱しながら、隙を見る。

最初の一撃や、自殺の偽装から見て？はかなり慎重なやつだ。
飛びかかったのも一見頭に血が上ったかのように見えるが、魔力を内に溜める時間稼ぎだ。
どうやら先の二発目の不発は、相手にとってはずいぶん痛かったようだが、そこで慌てないというのもまた？の実力を表している。
この連続打撃の中、少しの動きだけで避けているゼロに対し、二

発目レベルの大技を出すつもりだろう。
そして左フックをゼロが避けた時、？の右手はナイフを掴んでいた。
「風雅断絶！！」
片手持ちにされたナイフが、溜めた魔力を帯びながら振られる。
空気も魔力も何もかもを切り裂いて、ゼロを両断した
はずだった。
「何っ！　い、いないっ！　やつが……っ！」
瞬く間に羽根と化したゼロは、自らを探す？を見下ろしていた。
「トカゲのところに行ってろ、雑魚が」
再びゼロの前身は羽根と化す。
しかしそれらは避けるための『魔力の羽根』ではなく、ズタズタに切り裂くための『ナイフの羽根』だ。さながら『ナイフの雨』といったところか。
「バ、バカなぁっ！！」
とっさに身体強化を掛けたようだが、遅すぎたようだ。
逃げるのではなく防げばよかった、とは？も考えまい。
最後のセリフを言った時のゼロの嗜虐的な笑みは、とても慈悲を

持つ正義の味方には到底思えなかった。

◆◇◆◇◆

後日、ゲルド伯爵の遺体が発見された。
兵たちは眠らされ、適当な部屋に詰め込まれていたようだ。
現場は荒れた様子はなく、机には『遺書』が置かれていた。
そして、ここから事件の全貌が明らかとなっていく。

【コザ・ルケマ】男爵。ゲルドの親戚にあたるこの男は、国の兵の装備の管理を任されていた。
一介の男爵の彼が、なぜこのような大仕事を任されたかと言えば無論、ゲルドの推薦によるものだ。
だが、二人は戦時に使用する武器や鎧を、陰で金に換え懐に入れていたのだ。
国の未来を考えない一部の愚か者たちによる横領。
気づいたものには金を握らせ、それでも黙らないものは消していたという。

狡猾なものたちは、誰にも気づかれず私腹を肥やし続け、この国は衰退する……はずだった。

「コザ、ここでおさらばだ」

ゲルドがこの【アリア王国】の敵国、【グレイブ帝国】に移住すると言い出したのだ。
コザは説得を繰り返したが、「グレイブの姫に惚れた」といってゲルドは聞かなかった。
ゲルドが裏切れば自分も疑われる、そうなれば今までに自分の行いがばれるかもしれない。

かといって残った予備装備(金)は、気づかれないように計画的に盗っていたため、まだかなりの数余っている。

山のような大金と今まで助け合ってきた親友、彼は決断を迫れ――――自分を潤す、血濡れた金を選んだ。

暗殺者(?)を雇い、自殺に見せかけて殺す、完璧だったはずのこの策は、存在さえも知られていない第三者によって覆された。

コザ・ルケマ男爵、逮捕。

決定打となったのは、ゲルドの遺書、そして?の逮捕だった。

?はあろうことか、ゲルドの死体のすぐそばに寝ていたのだ。

彼の記憶は曖昧で、「コザから暗殺の依頼を受けた」「遺書は机の中に入っていたものを適当に置いておいた」などと証言しているという。

問題のゲルドの遺書には、自らとコザの横領が事細かに書かれていた。

自白、とも取れるその内容はコザの逮捕を決定的にした。

尋問の際、コザはこんなことを呟いたという。

「ガキの頃のままでいれば……金に踊らされることなんてなかったのかもな…」

第十二話「血濡れた金」（後書き）

お分かりの方も多いと思いますが、遺書を書いたり？の記憶をいじくったりしたのは我らが勇者様（笑）です。
ちなみに、ゼロが今回一番苦労したのはガラスの回収と修理だったりする。

閑話「小者な夢と無知な思い出」

閑話【小者な夢】

「お、お前！　俺が今までどれだけよくしてきたか、忘れたのか！！」

またかよ、と心の中で呟きつつも、ゆっくりとゼロは目を開けた。

天井で光り輝くシャンデリア、真っ白な壁に透明なテーブル、そこに飛び散る不似合いな赤い液体。

どうやらここは誰かの家、それも金持ちの豪邸のようだ。

美しく現実離れした装飾に目を取られる中、急に後ろに気配が現れた。

ノイズが入る視界に移る二つの陰、人だ。

一人はどこかを負傷したのか、床でもがいており、もう一人がそれをにやにやと見下ろしている。子供のような無邪気さとは程遠い、まるで目の前の怪我人をおもちゃか何かと勘違いしているような、狂気に満ちた目だ。

「今から死ぬっていうのに、過去を振り返ってもしょうがないだろう？」

血濡れた手で赤く染まったチェスの駒を弄りまわしながら、実に面白そうに彼は語っている。

「それともなんだ、残念でしたねっていってほしいのか。クククッ、kぢあうdじぇいd」

ノイズからくる言葉に混じった不可解な音、前回と同じく理解できない。
そう、これは自分の夢の中、ここにきて二度目の悪夢だ。
「ふざけるのもいい加減にしろ！！　よくもお、俺の……」
倒れている男はちらりとこちらを見て、顔を蒼くしながら目をそむけた。
（俺か？　いや違う、下…）
足元に目をやると、肉の塊、いや正確には彼の腕らしきものが転がっている。こうも激昂している理由はどうやらコレのようだ。
「ハッ、何度言わせるのか。これからお前は死ぬんだから、そんな小さいこと忘れろよ」
「バ、バカを言えぇ！　俺がこんなところで死ぬ何ｔ」
「ｍｏｙａｔｔｏ」
こちらではノイズで聞けなかったが、何かを言い放った途端、男の首が飛んだ。
いつの間にか、立っている方の男が剣を手にしていたのだ。
男、いや背丈から見ればまだ少年のほうが近い彼は、今しがた首を斬り飛ばしたばかりの剣をたかだかと振り上げ、壁に向かって振り下ろした。
真っ二つになった壁から見えたのは――――――――燃え上がる街だった。

「いい景色だと思わないか、じゅｙｆぢおえはぽ？」

何言ってんだか、という言葉は口から出ない。夢だからだろうか？

そんな中、少年ははっきりと俺に向かっていった。

「そっちは楽しいか、それともつまらないか？　もしつまらないなら、誰か殺せばいい。最高に楽しくなるぜ、クククッ」

「俺は狂わんぞ、殺ししか能がない小者が」

◆◇◆◇◆

閑話【無知な思い出】

「はじめまして、■■■くん。キミの話はお父さんからよく聞いているよ」

そういって男は握手を求めてきた。

なんて答えればいいのか、あの時のボクは分からなかったんだ。

不安そうに後ろを振り返ると、ここまで連れてきた父がいた。前までの萎れたシャツとはおさらばして、新調した黒のスーツを着ている。

ボクの不安を感じ取ってか、震える肩にそっと手を乗せ

「このおじさんはダフネスさんと言ってね、父さんの友達なんだよ」

だから心配なんてしなくていい、といった。だが――――――――――嘘だ。

見ただけではわからないが、小指が震えている。

これは父が嘘をついたり、現実逃避しているときに出る、本人は把握していない癖。

この時すぐさま反論してもよかった、だがあえて気づかないふりをした。父のメンツを守りたかったのだろうか、それとも……。

仕方なくダフネスと呼ばれる男の手を握ると、その顔が突如驚きに包まれた。

「……これはこれは」

まるで世界的な有名人にあったかのように、嬉しそうに握った手を上下に振る。

正直汗ばんだおっさんの手は、ベトベトして気持ち悪いし、まるで心の内を探るようなねっとりとした目は、おもわず潰したくなるほど憎たらしかった。

「おじさんもカガクシャなの？」

父がある程度の地位を持つ科学者だということは知っていた。

そして、リストラにあったということも。

ここが元職場だということはあらかじめ知らされていた、だから目の前にいる男が父と同業者であるとあの時のボクは思った。

「そうだよ、おじさんたちは■■■■を創りたいんだ。だから、君にも手伝ってほしいんだ」

あの時のボクは無知で無垢過ぎたんだ。

そもそも科学者が何をやっているのかも知らずに、のこのこと父について行ったのが間違いだったのかもしれない。

……いや、違うな。今思えばあれが始まりだったんだ。そのあとの痛みも苦しみも、今の僕を作り上げるための必然たる布石だった

わけだ。

だからこそ、今は身を潜めなければいけない。

彼の力を見極め、もしその最後がボクの予想通りであれば――――

閑話「ダンスと酒と時々聖母」

罪を犯した者たちに与えられるのは制裁という名の死か、生きるための不自由か。どちらにしても彼等彼女等の未来が暗いことに変わりはない。牢獄に入れば自由を失う、それが犯罪者としての当たり前なのだ。

だがあくまでそれは人の常識である。動物や魔物、それらを超えた人外には人の常識なんて言うものは当てはまらない。いくら足が速くてもチーターは１００m走には参加できないのだ。それは牢獄も同じで、調教されていない獣は自由を求め、牢に食って掛かるだろう。

自由を求めるということ自体に善悪があるかどうかは物議を醸すだろうが、大事なのはそこではない。求めるというのは立派な『欲』だ。アダムとイブは忠告を受けた筈なのにリンゴを食べてしまった。旧約聖書に出てくる人間は無謀にも塔を築き神に挑んだ。

『欲望』は人を翻弄する。それは世界や時代が変わろうと普遍たるものである。かくいう私も、それに囚われ踊らされた一人でもあるが。

底光キット研究所所長ダフネス・フォール

◆◇◆◇◆

「…っく、まずい。やっぱ飲むもんじゃないな」

わかりきった感想をこぼしながら桶を樽に突っ込む。中に入った透明な液体を掬い上げ辺りに撒く、単調でつまらなそうな地味な作業ながら彼自身はこれを楽しんでいた。床に薄く張られた液体は淡い蝋燭の炎を鏡のように映し煌めかせている。彼のような芸術にあ

まり関心のない者でも美しいと思える光景だった。薄汚かったここに芸術を作りだした、自らの善行から生まれた満足感を彼は味わっていた。

「そうだ、キミも飲みなよ。そうそうキミキミ」

そう見物客（ギャラリー）の一人を指すと、液体を汲み上げ彼の元へ。祝い酒を一人で飲むのはつまらないとでも思ったのだろうか、スキップ気味に歩いていく。

「遠慮はいらないよ、好きなだけ飲みたまえ」

桶を彼の口元に充て傾けていく――――が少し強引過ぎたらしい、大きく噎せてしまった。

飛ぶ水をうまく避けながら、お詫びにともう一度汲みに行く。自分はまるで聖母だな、なんていう妄言を頭に浮かべながら淵いっぱいまで酒を汲み上げる。

「さあさあ飲んでくれたまえ。なんたって今日は君と僕がこうして盃を交わす記念日なんだからね、多少は失礼があったって構わないさ」

穏やかな笑みを浮かべながら先より慎重に桶を傾けていく――――がまたもや噎せてしまった。気持ち悪くなってしまったのだろうか、顔を深く下げ口からは酒と涎が混じった液体が垂れ流れている。それに気付いていないのか、笑顔のまま先と同じように酒を汲み上げ飲ませてあげる。そしてそれを彼が吐き、また先のように汲みに行く。そんな中、酒と涎で塗れた彼がついに声を上げた。

「ももう勘弁してくれぇ！　死にそうだあおぇえ！！」

泣き叫ぶと同時に吐いてしまった。もったいないなと思いながらも、反省の意を込めて彼の頭から酒をかけてあげる。

「えー僕の油が飲めないっていうのかい。残念だなぁ」

穏やかな笑顔が崩れにやにやとした狂人の顔が現れる、と同時に吐き続けた彼は白目を剥きながら気を失ってしまった。頬を叩いても起きないと知ると桶を自分の口元に、そして一気に飲み干してしまった。

「っくぁ……やっぱまずい」

まあわかってたけどね、そう独り言をつぶやきながらここを去ろうとする、がそんな狂人に挑みかかる勇者がいた。

「てめぇはなんなんだ！　マヌケな捕まり方してここにとばされて、ずっと黙ってたと思ったらみんなぶっ飛ばしやがって！　何がやりてぇんだよ！！」

「そうだ！　この腐れ外道が！」

「頭のおかしい狂人め！」

「死にたくなかったら縄解きやがれくそったれが！」

兵士と犯罪者が同じようなことを喚くというのも十分珍しいが、自分たちの生死が相手に握られているというのに挑みかかる無謀さに思わず感心してしまった。彼等こそ真の愚か者なのではないだろうか。

壁に掛けられた蝋燭を取ると、自称聖母の狂人はその勇気に免じて質問に答えてあげることにした。

「決まってるじゃないかそんなこと。僕はただ――――自分に正直でありたいんだ」

狂人の手から転げ落ちた蝋燭は、煌めく炎をまき散らし爆炎という名の芸術を作りあげた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4145r/

異世界からの勇者=異世界の魔王

2011年11月1日20時31分発行